
未来屋と少年

白蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来屋と少年

【Nコード】

N2880E

【作者名】

白蓮

【あらすじ】

涼浜小学校6年の桃倉隼人は、来年は中学だからと、母親から強制的に塾に行かされることに。やがてその塾は遠くに移転し、隼人は別の塾に通うことになった。しかし、その塾は普通の塾ではなかった！？『未来屋』と名乗る、彼らの真相は一体！？

第一章：新しいオンボロ塾

第一章 「入塾」

「あちい・・・暑い・・・マヂあつちい・・・」
真夏の炎天下。傘を杖がわりに、汗を何滴もボタボタと地面に零しながら、俺は帰宅を急いだ。

俺、隼人^{はやと}こと桃倉隼人は、涼浜小学校に通う6年生。

もうすぐ中学だからって、親に一年半ほど前から通わされていた塾が遠くに移転してしまったため、今はその隣に建っていた今にも倒れそうなほどオンボロの、信賴しがたい塾に通わされ始めたのが昨日。

切、どうしてクーラー病の俺が、こんなぶっ倒れそうなほどに暑い真夏の炎天下の下、ヨロヨロと歩いているかということには勿論、理由がある。

・・・そう、今日は塾の下見に行ってきたんだ。

塾ってモノは、入塾した其の日から授業があるってパターンはあんまりない。だから母親に、「アンタどうせ、暇なんでしょ？宿題はやってないと思うけど。暇なら塾の下見に行ってきたさい。」、と無理矢理家を追い出され、今現在に至る。

・・・もともとは、塾なんか行きたくない。しかも、あんなボロ塾。

行く気なんて、どうしても起きるわけがない。

でも、周りの奴らに聞いても、「中学の勉強にそなえて・・・」なんて気取っちゃって、クラスメイトの殆どのやつが勉強を始めていた。

それをいち早く聞きつけた俺の母親が、今から一年半前、俺を強制的に塾に入らせた。

塾といっても、いい塾と悪い塾との、二つの種類があることは言うまでもない。

始めに通っていた塾は、『最悪最低』だった。先生だって、「ヤル気無いから」、テキストにやっというて」みたいな感じで、殆ど金儲けのために塾に勤めている感じだった。

そんな先生で、塾というものが初めてだった俺に、『塾』というものにいい印象が持てるわけが無い。

・・・だから、今回も気が乗らなかった。

確かに、今まで通っていた塾とは違うけど、一年半前に「塾とはこういうものだ！」って悪印象を持たされた俺には、今まで通っていた塾とは違う、なんて理論が通用するわけが無かった。

しかも元々、何をやっても三日坊主どころか一時間坊主の俺が長続きするわけが無い。どうせ途中で飽きていきなくなるのがオチに決まってる。

しかし、入塾してしまったからには金を払っているわけだ。

金を無駄にするくらいだったら塾に行くほうがマシだ。

・・・結局俺は、この道から逃れられないらしい。

様々なダークブルーの気持ちを押し寄せるが、周りの炎天下で無駄に温められる。

・・・そんな複雑な気持ちを抱えたまま、両親が仕事でいなくなり、少し寂しくなった家に入る。

少しでも冷たい空気に包まれ、気持ちよさを感じながら自室のドアを引いた。

「はああ・・・」

エアコンのスイッチを入れ、ベッドに倒れこむ。自然と瞼が下りてきた。

炎天下の所為で、1・5キロくらい歩いただけなのに物凄く疲れた。

体に溜まった疲労をベッドにしみ込ませながら、天井を暫し見詰めた。

る。

今日の6時から7時半までの一時間半の授業。

周りにはどんな奴らがいるのか。

授業は楽しいだろうか。

そんな、他愛もない疑問が、頭に浮かんでは消え、浮かんでは消える。

いつの間にか、俺は眠りの世界に迷い込んでいた……。

目が覚めた。窓の外を見ると、既に黄昏の空が広がっている。

慌てて時計を見ると、5時48分。

「やつば……」

急いでテキストにそこらへんに落ちていた筆箱を、ナップザックの中に詰め込む。

ドタドタと凄い音を立てて階段を下りて、踵を踏みまくってペタンコになった靴を履く。

ドアが取れるんじゃないかというほどの勢いでドアを開けると、ハンドルが少々さびている自転車にまたがり、超特急でオンボロ塾まで向かう。

途中、何回赤信号を無視しただろうか。何回転びそうになったただろっか。

ついた頃には、幼少の頃の記憶が全てなくなっただかのように思えた。

腕時計を見ると、5時58分。

二階建ての塾の二階が、白く光っていることから、二回の教室で授業が行われるらしい。

急いで教室を登って座席表を確かめると席に座り、授業の開始を待つ。

・・・だが。

「・・・？」

授業開始時間から20分も経ったのに、一向に先生が教室に入ってくる気配がない。

周りの奴らはいいい奴らで、新入生の俺に話しかけてきてくれるためか、俺は既にこの中に馴染んでいた。

中でも、黒髪の俺に似た少年はいいい奴で、気が合いそうだ。他にも銀髪のやさしそうな少年や、赤髪をツインテールにした、気の強い少女。そして、ピンクと赤の中間くらいの長い髪を後ろで一つに括っている、頭がよさそうな女の子。

どの人も、俺が席に座っていると話しかけてきてくれた奴だ。人数が少ないからか、一人でも新人が入ると嬉しいのか。わからないが、兎に角嫌なやつがいなくてよかった。

「・・・そーいえば、自己紹介が遅れたな。俺は桃倉麗一。宜しくな!!」

「奇遇だな、俺と苗字が同じじゃねえか。俺は桃倉隼人。」

黒髪の少年は、麗一すきすえこよみというらしい。

「アタシは、月末暦。」

「私は、中村英子といます。」

「ああ。みんな、宜しく!!」

それから俺たちは、暫くの間話をしていたが、俺はふと思ったことを聞いてみた。

「そういえば、先生はまだ来ないのか？もう6時45分だぜ？」

聴いた瞬間、みんなの顔が微妙に曇った。

聞いてはいけないことだったのか？

気まずい空気が流れている。流石にこの状況はよくない。

「あ、いや、べつにいいんだ。若しかして今日だけ、先生が休みとか、そういうこともあるんじゃないかなって。」

「・・・。」

「あの・・・」

麗一は、少し悲しそうな表情になって言った。

「いいんだ。もう帰ろうぜ。どうせ、先公は来ねえんだし。」

「えっ！？いいのかよ!？」

「ああ。」

麗一は、俺を半ば強引に教室から引きずり出すと、「ついて来い」と、ただそれだけ言った。

何も言い返せない俺は、大人しくついていくことにした。

塾から出て、やがて人通りのない路地に着いた。

路地には一件の喫茶店がある。

麗一は、何のためらいもなく其の店の中に入り、俺も連れ込む。

店の中は、意外と明るかった。とは言え、周りの棚の中においてある書物の文字は、見たこともないし、用途不明な道具まで置いてある。

店の主人は、先ほどから麗一となにやら話している。思わず、聞き耳を立てた。

「・・・だから、説明しろって言うてんだ。」

「・・・アンタなあ、アタシが説明嫌いなわかってて言うてんのやろ?」

「そうだが?」

「アタシは、もう普通のニンゲンとは関わらんことにしとんねん。それに、メンドイ説明せなあかんのは、もっとごめんや。」

「俺だって嫌さ。だけどな、俺みたいな脳ミソの面積が狭い奴が説明したって、あいつには絶対理解できない。」

「・・・まあ、そうやな。レイチよりも脳ミソの面積、狭そうやし。」

聞くのが嫌になってきた。俺だって一応、学校のテストでは90点くらい取れるんだぞ。なめてもらっちゃ困る。

とは言うものの、やっぱり会話の内容が気になる俺は、棚のものを
見るフリをしながら更に二人の会話に耳を傾けた。

「・・・って、そんなことより、兎に角説明が下手な俺じゃ無理
だ。説明が上手いお前に頼るしかない。」

「そういわれてもなあ・・・。だって、アンタ店長やる？だった
ら、説明の一つや二つ、できんのかい。」

「無理だからお前に頼んでんだろ。俺だって、好きでお前みたい
な醜い闇の商売人なんかには頼みはしないさ。自分で解決できる事は
解決する。」

「あたりまえや。・・・とは言え、『醜い闇の商売人』ゆうところ
が引つかかんねなあ。」

「あ、いや、だからそれは聞き間違いってことで。若しくは空耳。」

「けっ、しゃーない。そういうことにしとき。」

「って、話それすぎてるけど、実際のところ説明してくれるのか
？あいつは、俺たちのことは何一切知らない。それに、魂が汚れて
いるわけじゃない。俺たちに危害を及ぼす影響は、まずない。」

「・・・・・・・・・・」

「だから頼む。俺たちには、もう時間がない。一人でも『時間調
整者』を増やして、世界の崩壊と滅亡を阻止しないとイケないんだ
！！！！」

「・・・・・・・・・・」

「お前だって、考えてみろよ。この世界が破滅したら、もう商売
が出来なくなるんだぞ。」

「それがどうしたっていうねん。」

「だから！！商売が出来ないんだぞ！？金儲けなんて、できるわ
けないじゃねえか！！！！」

「つつ！！！！それはいかぁー！！！！！！」

だんだん、常人がついていけないほどにスケールの大きい話になっ
ていき、もう何が何だかわからなくなつた。大体、世界の崩壊と滅

亡ってなんだよ!?

そんなことを考えている俺など、まるで眼中にないいうように店の女は、電光石火のスピードで棚から妙なマントのような着物（ローブ、って言ったほうが近いかもしれない）と、得体の知れない水色に発光する透き通った液体、用途不明の、金属で出来ていると思われる杖をとり出し、ローブを羽織ると、液体の入っているビンが割れるんじゃないかというほどの勢いで、ビンをテーブルに置く。そして杖を壁に立てかけると、血眼になったまま俺のほうを睨むように見る。

「その少年! ! ちよつとこつちに来いや。」

いきなり呼ばれて、ドキツとした。別に悪いことをしたわけじゃない。それに、悪い事をしていないのに、呼び出しをかけられてドキツとする人は、学校の先生くらいしか居ない。

「は、はい・・・?」

躊躇いながらも、店の主人なのであろう女のもとに歩く。

「ええか少年。アンタは、この世の救世主になるかもしれないンゲンや。」

「はあ! ?」

いきなり、何を言っただ、この店主は。

「はあ! ? やない。とにかくや、アンタには今日から、『時間調整者 未来屋』になつてもらわないと、ヒジョーに困んねん。」

「はあ・・・? じかんちょうせいしゃ? みらいや?」

近くで聞いていた麗一が、ため息をつくのが聞えた。

「あのなあ、まだコイツは何も知らないんだぞ。いきなり『時間調整者』だの『未来屋』だの言われても、こんがらがるのは当たり前だろ。」

「ああ、そうやったな。少年、よく聞き。コレは、世界の崩壊を防ぐために自らの命を犠牲にして戦った、一人の女と、その他の二ンゲンの話やで。」

「はい。」

「・・・おい、何いつてやがる。今はお前の勝手な妄想の作り話を話している場合じゃ・・・」

麗一の声は、女店主のドでかい、「ハーククショオイ!!!!!!」というクシャミの音でかき消されてしまった。

不機嫌になった麗一は、もうどうにでもなれといった表情で、手を組んで壁にもたれかかったまま目を瞑ってしまった。

「・・・人に話させといて、自分だけ寝よ思うなんて、アンタも随分と高いご身分になったもんだねえ、レーイチ!？」

今にも怒り出しそうな(つていうか、もう怒ってる)女店主。話が聞けない俺は、とりあえず女店主に声をかけてみることにした。

「あの・・・」

「なんや!!!!!!」

「いえ・・・だから、話は・・・?」

「ああ、そうやったな。・・・いいな、少年。」

「え? あ、はい。」

急に真剣になった女店主の眼差しには、絶対に否定できない、強い光が宿っていた。

「ちつとばかり理解しがたいかもしれんが、そこは我慢して聞いてくれや。これから話すことは、紛れもない事実・・・。それに、今現在起きていることなんや。」

「は、はい!!!」

第一章：新しいオンボロ塾（後書き）

初めまして、白蓮です。ここでの投稿は初めてです。小説歴も一年と短いですが、どうかお付き合いください。宜しく願います。
追記：私は関西弁を話す地方の人間ではないため、店主の関西弁がヘンかも知れませんが…なので、その辺のアドバイスや、その他、何か質問やコメントがありましたら何でも聞いてください。答えられる限りで答えます。では

第二章：時間調整者と未来屋（前書き）

～コレまでのあらすじ～

小学校6年生の勇人は、母親から無理矢理塾に通わされてしまう。

しかし、その塾は普通の塾ではなかった！？ 『時間調整者』と呼ばれる、彼らの実体は！？

第二章：時間調整者と未来屋

「・・・この世は、一日ごとに新しい世界へと移される。つまり、一日たったら、別の何もない世界に、今の世界『中身』だけに移されるんや。『中身』つつうのは、この世界の住民や建造物の事を言う。わかるか？」

「え・・・？ま、まあ。」

否定をするとなんて言われるか分からないため、とりあえず曖昧な返事を返した。

「で、勿論普通のニンゲンが、別の世界に自力で行く事なんかできるわけない。だから、特殊な能力を持ったニンゲンが世界と世界のハザマ、『境界』と呼ばれるところに集まり、一日が経とうとする世界から新しく作り出された、新しい世界へと『中身』を移動させるんよ。」

そこまでいって、店の女主人は傍らにおいてあったペットボトルを乱暴に掴み、中に入っている半透明の液体をグビグビと飲んだ。普通に見ればスポーツドリンクのように見えるが、何しろこんな不気味で妙な店である。マトモなものが置いてあるとは思えない。この女主人だって、若しかしたら毎日の食事ではカエルのホルマリン漬けとか、蛇のハチミツ漬けとか食べているかもしれない。

「なんや、少年。薄暗い顔しよって。若いもんが、そない顔しとつたらこの国の未来が危ないかも知らんやないか。」

「あ、いえ。なんでもないです。話を続けてください。」

「で、や。その特殊な能力をもったニンゲンは俗に、『時間調整者』と呼ばれとる。アタシ的には、『世界調整者』のほうがええと思うんけど、何しろ昔からそう呼ばれとるもんでな。しょうがない。そんなことは置いといて、時間調整者は、世界中を探しても精々、10人前後しか居らへん。というか、この国にしか居らん。前はもつといたんやけど、能力退化が始まりよってな。能力が退化して、

時間調整者で居られなくなったんや。で、残ったモンが今日、塾に居た奴らだけなんや。」

「そうなんですか・・・。」

未だによく分からないが、兎に角深刻な問題だということは、雰囲気的に理解できた。

「能力は、寿命が来るまで持続し続けるもんやないんや。有る程度の時期が過ぎると、その者は能力が退化し、能力を失い、時間調整者だった頃の記憶を失う。残りの人生は、普通のニンゲンとして過ごし、そして死んでいく。勿論、元から能力がないニンゲンは生まれ、そして人生を普通に送った後に寿命や其々の事情で死んでいく・・・能力は、『空間移行能力』言うんやけどな、今、その能力をもったニンゲンが不足しとって大変なんや。勿論、世界の中身を別の世界に移すのは、大変な事やで。それを10人前後でやるんや。一人にかかる負担は、計り知れん。」

女主人は、またペットボトルの中身を豪快に飲む。

俺は、先ほどから小さな棘のように頭に引っかかっていた事を聞いてみることにした。

「あの、『未来屋』というのは一体、何ですか？」

「ああそれ？それはなあ。」

女主人は、中身を飲み干して空になったペットボトルを、わざとなのか違うのか分からないが、麗一のほうに向かって投げた。空中に舞ったペットボトルは綺麗に弧を描き、見事に麗一の頭に当たった。

麗一は一瞬、殺気の宿った鋭い目で女店主を睨みつけたが、女店主はそんなことはまるで気にしていないように、新しい飲料をキッチンにとりに行った。

無視された麗一はため息をつき、再び腕を組んで壁にもたれかかって寝息を立て始めた。

キッチンから戻ってきた女主人は、今度はおつまみも持ってきていた。

「アンタも食え。美味しいで。」

皿の上に乗っているのは、薄黄色の砂糖塗れの得体の知れない物体。見方によっては美味しそうにも見えるし、不味そうにも見える。

しかし、此处は一応『義理と人情』ってものが必要だと思った俺は、皿の上に乗っかっている砂糖塗れの物体に手を伸ばし、それを口の中に入れた。

瞬間、香ばしい香りと、上品な甘さが味覚を伝う。

「な、なんですか？コレ・・・凄く美味しい・・・」

俺が感動していると、女主人は得意げな顔になって話し出す。

「ああ、それはな。アタシが裏ルートで手に入れた・・・」

「未来屋の話はどうなったんだ！？」

女主人の声と、麗一の声が重なる。何となく、女主人のいう『裏ルート』というものが気になったが、此处はぐつと我慢をする。

「ああ、忘れとった。えつとなあ。未来屋は、ただたんに時間調整者の集まりにつけられた団体名みたいなもんや。数年前、時間調整者の中の一人が、団体名のない集まりなんて寂しすぎるとか言いよつてな。当時、『ワールドボンバー10』^{テン}とか、『難波の闇商人』とか色々でたんやけど、結局一番シンプルだった『未来屋』に決まった。」

そこで、すかさず麗一が口を挟む。

「それに、『難波の闇商人』ってのは俺たち時間調整者のことじゃなくて、絶対お前のことを指して言ってるに違いないしな。」

女主人の鋭い視線が、容赦なく麗一を襲う。しかし、女主人の鋭い眼光などものともせず、麗一は口笛を吹いて知らん振りする。

知らん振りされた女主人はため息をつき、俺のほうに向き直る。

「まあ、つまり『未来屋』には深い意味はない。気にせんでええよ。」

「はあ・・・そうですか。でも、どうして俺にこんな事をべらべらと喋るんですか？こういうことって、普通なら一般人に話しちゃいけないんじゃないんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

急に押し黙る女主人。一瞬躊躇した俺だが、俺にトツプシークレットとも言えよう事実を喋りきって、一体何をしたいのか。

分からなかった。

未来屋とか時間調整者とかの、細かい設定が、ではない。

この女主人と、麗一たち時間調整者が、何を考え、そして何をしようとしているのか、が。

気まずい雰囲気の流れる中、口を開いたのは女主人だった。

「単刀直入に言う。アタシらは、アンタに時間調整者になってほしいねん。」

第二章：時間調整者と未来屋（後書き）

二度目の投稿になりました。今回も、女店主の関西弁が上手くかけているのか不安でたまりません。（というか、女主人が出てきて、台詞を喋らせる時があればいつでも不安です…）そんな些細な事は気にしないっ！！という心の広いお方が居れば、その人には何度頭を下げてでも頭が上がらなくなるでしょうねえ（遠い目）では、長文＆乱文失礼しました！！

第三章：真夜中の仕事（前書き）

「これまでのあらすじ」

小学6年の桃倉隼人ももくら はやとは、もうすぐ中学だからという理由で母親に強制的に塾に通わされることになった。しかし、通っていた塾は移転し、また新たな塾に通うことに。しかしその塾は、『普通の人間が通う塾ではなかった！？』

その塾に通う人間、『時間調整者』の仲間に、勇人は自分も調整者としての能力がある、と言われて混乱してしまう。

第三章：真夜中の仕事

再び沈黙が流れる。そして口を開いたのは、またもや女主人だった。
「って、さつきも言ったやんか。『アンタには今日から、時間調整者 未来屋になってもらわんと、ヒジョーに困る』って。」

「えエ！？だ、だってアレは、貴女が金儲けが出来なくなるとか
いって、それでつい口走ったことかと信じていたのに！？」

「世の中、信じた事が全て叶えば苦労せんで、少年。アンタには、
既に時間調整者としての能力の『芽』が芽生えとる。諦め。」
まあ、それはそうだけど。

話が急すぎる。だって俺は、今日、塾に行つてこの奇妙な店に来る
までは、普通の人間で。普通の人生を歩むと義務付けられていたはずの人間で。

そう思っていたのは、勘違いだったのか。
いろんな感情が頭の中を駆け巡り、俺は居ても立っても居られなくなつた。

・・・気がつけば俺は、夏の満月の下、薄暗い路地を全力疾走していた。

夜。夏独特の、色の濃い満月が夜空の真ん中に差し掛かるとき。

麗一は、隼人の家の屋根の上に一人、佇んでいた。

何をしようとしているわけではない。かといって、ただボケっと突っ立っているわけでもなさそうだ。

このときの麗一は、普段とは違う姿をしていた。体は半透明に透き通り、服装は、現代人が着るような服とは思えない、まるでファンタジーのような幻想じみた服を着ている。

そして腰には、何のために使うか分からない、純白の鞘に包まれ

た日本刀が差しである。

麗一は、暫し満月を見上げたあとにため息をつく。それが何のために吐かれた息なのかは、麗一自身でも分かっていなかった。

ただ、自分が困り、迷っている事だけは分かっていた。

しかし、自分が何に困り、迷っているのかは分からない。

——分らないことだらけだな・・・。

麗一は、自嘲するように苦笑した。着ている服とはギャップがありすぎる、最新式の電波腕時計に目をやる。

11:58

後二分。この世界が、完全に新しい世界に移るまでの時間だった。

昔は、時間調整者などこの世には必要なかった。

『世界』は、薄い光の被膜で構成されている。しかしそれはとても脆く、とくに人間が懐く『負の感情』で傷つきやすい。もしも傷ついた世界をそのまま放置すると、世界の被膜はやがて破裂し、中にいる人間や建物、つまり世界の『中身』と呼ばれる存在が、最初からなかったことになってしまう。人口が今より少なかった昔は仕事があつたとは言え、それは一ヶ月に一度や、それくらいに世界を取り替えればすんでいた。

しかし、時代が進むにつれ人口が増え、世界を傷つけるものとなる「負の感情」の発生量もそれに伴って増加していった。

やがて一ヶ月に一度が二週間に一度、一週間に一度と間隔が狭まり、今では一日に一度にまで狭まった。

このまま行けば、遠い未来には一時間くらいに一度世界を変えないと、世界が傷ついて使い物にならなくなるのだろうか。

一瞬脳裏に走った縁起でもない考えを頭から消すと、手に持っていた長い金属で出来た槍にも矛にも見えるそれを天高く、月に向かって突きたてた。槍にも矛にも見えるそれは、夕方に女主人——春日川由香が手にしていたものと同等的なものだということが伺える。

時間は、丁度12時。

つきたてた槍の先、ちょうど満月を中心とした夜空が、徐々に透けていく。

透けて見えるその先は、何もない真つ暗な空間。

その暗さは、夜の闇よりも暗く、儚く見える。

昔は怖かったこの光景も、時がたつにつれて慣れてきた。

麗一は、つきたてた槍をそのままに、口の中で慣れ親しんだ呪文を唱える。

この時間調整者という職業は、別に一般人に知られてもなんら問題はない。

ただ、彼らは恐れた。自分たちの持つ能力のために、自らに襲い掛かるかもしれぬ災厄を。

故に、時間調整者という職業は、未だ世間には知られていない。

呪文を唱え終わった麗一は、白銀に輝く槍の先で夜空に円を描く。

そしてその中心を突くように槍の先で円の中心を貫いた。

刹那、夜空を覆い隠すように淡い光が一瞬、空の中心から陸に向かって、円状に走った。

それを見届けた麗一は、満足げに微笑むと空に向けていた槍を下ろす。

「今夜も、成功したな。」

小さく呟く。それは、仕事のために異空間へと向かった仲間たちに向けられているようだった。

夜風に黒髪を靡かせながら、半透明だった麗一の体が戻っていく。それと同時に、着ていた服が昼間着ていた服に変化し、もっていた槍のような矛のようなそれも、手から光の粒子となって消えた。

第三章：真夜中の仕事（後書き）

こんにちは　第三章です。感想の覧を見たら、今までに二人コメントをくれていました。私は嬉しい限りです。小説を書き始めるとき、「うーん、とりあえず、一件でもコメントをもらえればいいかな。」なんてボケたこと考えていましたが、それを超えました！！それではっ！！　コメントをくれた皆様、有り難う御座いました！！！！！！

第四章：金に汚い商売人（前編）（前書き）

（前回までのあらすじ）

母親に無理矢理行かされた塾は、ただの塾ではなかった！？塾に通っている特殊な人間から、自分も『時間調整者』の能力に目覚めているという真実を聞き、隼人は混乱し、家に帰ってしまう。そんな隼人の行動を調べてほしいと、麗一は『店』へ向かった・・・。

第四章：金に汚い商売人（前編）

翌朝。夜中まで一夜にして知りすぎた自分の真実と戦っているうちに、眠ってしまったようだった。

今は夏休みだから寝坊しても問題はないけど、小さすぎて気にも留められないほどの小バエのような問題があった。

それは・・・

ラジオ体操。

4年生の夏・・・いや、それ以前から俺は、マトモにラジオ体操に通ったことがなかった。

俺には元々兄弟がいて、兄は離れた高校に通うのが面倒くさいとこのことで高校の近所の友人の家に、高校生活が始まってから一ヶ月もたたないうちに居候を始め、弟は病弱な体質ゆえに今は入院している。両親は仕事に急がしく、日本中を駆け巡るような仕事をしているが厄介な事に、最近になって何の予兆もなしに家に帰ってきたと思ったら、いきなり「塾へ行け！！」なんていわれる仕舞いだ。

・・・つと、話がずれすぎた。

兄は、「朝から面倒くさいラジオ体操なんか行きたくない。それに、俺の体は体操なんかしなくても元々ほぐれている。」なんて気取っていたため、ために上体反らしをやらせてみたら腰の辺りから小さく「バキッ！」という音が聞えた事は、可哀想なので黙っておいてあげた。しかし、そんな兄も一週間に一度か二度はラジオ体操に行っていた。

当時は今より健康だった弟は、毎日ラジオ体操に通って、皆勤賞をもらってニコニコしていた。

兄も通った回数が少ないが、一応通っていた、ということで説教は免れていたと聞いていた。

そして俺は、一度もラジオ体操に通ったことがなかった。俺が思うには、朝で眠いのには無理矢理体を動かしたら、逆に体に悪いような

気がしてならなかったからである。学校に行つて、ラジオ体操出席カードを出すたびに、毎年の夏休み明け早々に説教されていた。理由は毎年同じで、「どうして隼人さんはラジオ体操に行かないの！」「だった。3年生頃から説教の内容に飽きてきた俺は、ために自分の「朝から無理してラジオ体操に行くのは体に負担がかかる論」を先生に一部始終教えてあげたが、流石は中・高学年を受け持つ先生だけあつて、俺の美論はどの先生の前でも粉々に砕け散ってしまった。4年生になつてからは、粉々になつても修復できる必殺美論を考え、繰り出したがこれまた大敗し、5年になつてからは、毎度のように悉く先生の手によつて砕かれる論を考えるのが面倒になり、カード提出時の説教はくらうだけにして被害を最小限に留めておいた。ちなみに、『美論』というのは俺が作つた言葉で、読んで字の如し『美しい論』という意味を持っている。

今年は如何しようか迷つた。以前の俺なら、「面倒だし、考えなくていいや。」なんてお気楽な事を考えていただろう。しかし、今年は小学校生活最後の夏休み。最後の夏くらいは、ド派手に飾つて終つてもいいかな、なんて考えも、窓の外に広がる、真つ青な空に浮かぶ入道雲のようにわきあがっているのであつた。

今は八月の初め。未来屋だかなんだか知らないけど、関わらなきゃ別に関係ないだろう。

そんなお気楽な考えを適当に繰り出し、俺は机の上に乗つかつている手付かずの宿題の山を完全無視し、リビングに向かつた。

リビングのテーブルの上には、ラップに包まれた朝食がおいであつただけだった。どうせ母は、滅多に帰ってこられないから、という理由で友達と遊びにでも行つたんだろう。

「はあ……」

お気楽なもんだ、という気持ちを含めて、ため息をついた。

テーブルの上に乗っている冷えた朝食は温めず、そのまま食べる事にした。

八月初めの日、麗一は男子制服の夏服に身を包み、道を歩いていた。

通りすぎる人々が気にするのは、本当は「どうして夏休み中なのに制服を着ているか」。しかし、そんな細かい事までネチネチと拘るような、嫌な奴はこの町にはいない、と麗一は信じていた。麗一にとって、制服＝私服くらいにしか思っていない。時間調整者だってちゃんと学校に通っている。

と、そんなことはとにかく。麗一は、とあるコンビニの前で足を止めた。勿論呼び止められたからだ。

「オイ、そのガキ。」

麗一の事をそう呼んだのは、コンビニの前で屯していた不良のリーダーらしき男だった。

麗一は、不良たちの言葉を無視して再び歩き始める。しかし、不良たちはしつこく麗一につきまとう。

「なに無視してんだよ。」と、リーダー格の男が麗一の肩を強引に掴んだ。

刹那。麗一は、リーダー核と思しき男の額に一発、デコピンを食らわす。

デコピンをくらった男は軽く10mは吹っ飛ぶ勢いでコンビニの窓に激突し、「ぶぎゃあ！！！」というカエルを踏み潰した時のような悲鳴をあげ、そのまま気絶してしまった。

他の不良たちは、怯えながらも「か、かかれええ！！！」という掛け声で、一斉に麗一に飛び掛る。

麗一は面倒くさそうにため息をつく、襲い来る不良に攻撃を仕掛けた。

一人目には、首の後ろに回し蹴りをし、二人目には顔面に裏拳。三人目は肘で鳩尾を突かれ、泡を吹いて倒れた。四人目は股間を蹴られて気絶した。

麗一は、さほど汚れているようにも見えない手を、パンツ！！パンツ！！と払う。知らず知らずのうちに出来ていた人垣から、拍手が沸き起こる。まわりの拍手や歓声に、大して興味を示すことなく麗一は、目的の道を一人進んだ。

麗一はやがて、人気のない路地に入っていく。目的の場所は、『未来屋使用道具販売店』通称、『店』に行くつもりだ。店の女主人も、元々立派な時間調整者だったが能力を失っていないのに、とある理由から、自ら時間調整者としての道を歩む事をやめた。その後は、せめて調整者の協力だけでも、と、時間調整者が必須としている道具を取り扱う店を経営し始めた。

しかし、麗一と女主人は仲が悪い。傍から見れば、あまり仲が悪いようには見えない。しかし、彼女と麗一とは、昔から犬猿の仲なのだ。

そんな女主人の経営する店にわざわざ出向くには、理由がある。昨晚、店を飛び出してっきりの隼人の調査をしてほしいというものだ。女主人は金に目がなく、お得な情報を他人に教える際には必ず高額な金額を要求してくる。勿論、現役学生の麗一は金などあまり持っていない。持っている金といえば、制服のポケットの中に入っている42円が全財産だ。他の学生も麗一同様、少々金に汚い女主人が求める高金額など持ち合わせていない。麗一は、泣きながら女主人の経営する店を飛び出していった学生調整者を、なんども目にしてきた。最初から金などはらう気がない麗一はとりあえず、得意の口喧嘩で女主人を黙らせ、金を払わずにお得情報を聞き出すという必殺技を繰り出していた。女主人は、麗一に何度も飽きることなく、「れでい」になんつゝ失礼なことするんや！！」と怒鳴ったが、麗一は最早、女主人の性別などどうでもよかったため、その言葉は記憶の中から消していた。

店のドアの前に来ると、中から声が聞えた。女主人はまた、高額

の金を要求しているに違いない。麗一は溜息をつく、ドアノブに手をかけてドアを開く。中にいた学生調整者と、女主人、春日川由香の視線が、俺に注がれる。

「なんや、レイイチやないか。レイイチからも言っちゃってや。

この子、アタシの商売魂の欠片も分かってくれへんねん。」

春日川の言葉に、学生調整者はブンブンと首を振る。少し泣き顔だったため、目にたまっていた涙が一緒に飛び散る。

「ウソです！！この人、学生がお金をあまり持っていないことを知っていながら、高額のお金を要求してきて・・・僕、その情報から手に入れた知識が幾つもあるのに・・・」

そう嘆く学生の目からは、再び新しい涙が零れ落ちた。

「そうか・・・。まだ帰るなよ。俺が無料で聞きだす方法を実際に披露してやるからな。」

慰め言葉になったのかはわからなかったが、学生調整者は笑顔を浮かべ、店の中に設置してあるベンチに腰を下ろし、麗一が話し始めるのを待っている。

麗一は、レジの向こう側にいる春日川に向かって、言葉を発する。

「あのなあ。確かにこの店は調整者しか来なくて儲からないのは知ってる。けどな、だからといって貧乏な学生から金をひつたくることはないだろ。」

その言葉は、これから始まる、春日川との壮絶な『口喧嘩』という戦いの開会の言葉だった。

第四章：金に汚い商売人（前編）（後書き）

こんにちは！白蓮です。とうとう四章です。4章ですよ！?!?!?よんしょ（以下略 うおっほん（咳払い）とりあえず、4章に突入しました。今までに頂いたコメントを糧に、これからも頑張っていこうと思います！?!?!?では！ ノシ

第五章：金に汚い商売人（後編）（前書き）

（コレまでの粗筋）

母親に無理矢理行かされた塾に通う生徒は、『時間調整者』と呼ばれる人間たちだった。自分は普通の人間だと信じていた主人公に、調整者の人が、「お前にも調整者としての能力がある」といわれ、混乱していもう主人公。そんな主人公の様子を探るため、麗一は春日川のもとを訪れる。そこにいた学生時間調整者の手に入れたという情報を聞き出すことに成功する。

第五章：金に汚い商売人（後編）

朝食を食べ終わった俺は、何をしようか迷った。友達と遊ぼうと思っただが、夏休みに入る前に、「俺、8月になったら、二週間外国に行くから、遊べない」といわれていた事を思い出す。

もちろん我が家には、外国に旅行に行こうと思えば行けるくらいの金ならあるが、旅行に行く暇がない。両親に頼んだとしても、「我が家の財産危機のときに、なんて贅沢言うの！！」などと、適当な理由で追いつ返されてしまうのは分かっていた。金持ちの一家はいいよな、と友達に言っただのを覚えている。

なら、宿題をやればいいじゃないか、だって？

俺の眼中の中には、とりあえず山積みになった宿題の本とがない。つまり、宿題をやる気は、一グラムもないということだ。

ため息をつき、ベッドに仰向けになって倒れこむ。

・・・なんのヒネリも無い毎日。

・・・生きていて、楽しいのかも分からなくなるような毎日。何も無い天井を見上げながら、本当は時間調整者になったほうが、少しは毎日が楽しくなるのかも知れないと、そう思った。しかし、気持ちには依然として変わらないまま。自分に芽生えた能力を、本能の根底が、全身の細胞一つ一つが、認めないと拒絶していた。

「はぁぁ・・・」

考えているのが馬鹿らしくなった俺は、寝る気も無いのに眼を閉じた。

眠気は無かったのに、自然と眠りの世界へ誘われる。

俺はそのまま、事の進み具合に身を任せ、眠りの世界に自分から飛び込んだ。

「五月蠅いなあ！！！全く、さつきから金金かねかねって！！！
テメエは金大好き村の住人ですか！？！？」

「なんやそれ！！！アタシは一介の商売人に過ぎへんわ！！！」

「金大好きって所を忘れてるって、何回言ったら分かるンだよ！
！！本当はお前のほうが、俺より脳ミソの容積が小さいんじゃない
のか！？！？ええ？一度病院に行つて見てもらつたらどうだ！！！つ
いでに、『自分は金大好き症候群にかかつてないですか？』って聞
いてこい！！！今すぐ言つて来い！！！」

薄暗い照明がとる店内では、薄暗さをぶっ飛ばそうとしている
のかと思うほどの火花を、バチバチと散らしながら、春日川と麗一
が言い争っていた。ベンチに座っている少年は、二人の声が五月蠅
いのか、二人の物凄い剣幕が怖いのか、ベンチの隅っこで震えなが
ら縮こまっていた。

「大体今は、若者の活字離れたのなんなのって問題になつて
どな。俺には関係ない！！！休み時間には本しかよんでねえよ！！
！」

「それでいいつつてんやろが！！！この死に損ないが！！！」

「死に損ないはお前だろ！！！！金に執着心がありすぎるんだよ！

！！！」

麗一は最早、本題を忘れて世間話に突入している。春日川もそれに
つられて世間話にうつる。

先ほど縮こまっていた学生調整者は、震えながらも呆れ顔で二人の
経緯を見守っている。

「大体レイイチは、何のために此处に来たんや！？用も無いのに、
あんたの顔なんか見たないわ！！！」

「俺だつてお前の顔を今すぐ記憶の中から消し去りたいさ！！！」

「で、用件はなんなんや？」

少し穏やかになった春日川を見て、自分も気を鎮める麗一。落ち着
きを取り戻した麗一は、昨晚出て行ってしまった隼人の様子を探っ

てほしいと頼む。そして、ドサクサに紛れて、学生が聞きたがつていた『お得情報』を見事に聞き出し、それを学生に教えると学生は、喜んで店を出て行った。春日川は「やられた・・・！！！」的な表情をしていたが、麗一は何の表情も示していなかった。

「ああ・・・アタシの金儲けが・・・こうなったら、レイイチ。隼人の様子を調査するのは、有料にさせてもらいまっせ。」

「ええ！？！？」

「気にせんでええ。アンタかて、さっきの学生と同じや。金なんてマトモに持つとらへんのやろ。」

「ああ。今制服のポケットの中に入ってる、42円が全財産。」

「（それで、どうやって世の中で生きていこう思たんや・・・？・・・まあええ。）」

「じゃ、無料なんだな？」

「アンタ、アタシがそこまで潔い思たんか？まだまだ青いのお」
「なっ！？」

「アンタがオトナになったら、稼いできた金、片っ端からむしつたるわ。覚悟しとき。」

春日川は、のどが渴いたのか台所に飲み物をとりに行った。確かにクーラーがなく、扇風機一台で店内の空気をかき回しているだけだから、空気が澱んで蒸し暑い。

しかし、麗一にはそんなことはどうでもよかった。

ただ、大人になって稼いでも、金が貯まらないということだけが、非常にショックだった。

第五章：金に汚い商人（後編）（後書き）

第五章です。ずいぶんと長く書いたような気がしますが、まだ五章です。頑張らないと・・・！！　　そういえば、粗筋を読んでいる人がいるかどうかは分かりませんが、粗筋と本文内容とは、少し誤差があると思います。正しいのは本文ですので、そこは宜しく願います。ではノシ

第六章：同胞（前書き）

（粗筋）

母親に無理矢理行かされた塾に通う生徒は、『時間調整者』と呼ばれる人間たちだった。自分は普通の人間だと信じていた主人公に、調整者の人が、「お前にも調整者としての能力がある」といわれ、混乱してしまふ主人公。そんな主人公の様子を探るため、麗一は春日川のもとを訪れる。そこにいた学生時間調整者の手に入れたという情報を聞き出すことに成功する。

第六章：同胞

麗一は、自動販売機の前で難しい顔をして佇んでいた。

・・・店から出て家に帰った麗一は、『我が家の絶対権力所持者2』である姉、清美に「自動販売機で美味しい飲み物を買って来い。」と千円札を渡されて家から摘み出された。

金が出されただけマシだったが、清美は自分の味覚にそぐわない飲み物だと口をつけもしない。

『桃倉家走り使い1号』である麗一には、勿論反抗する権力さえない。

ため息をついて、自動販売機の神様に祈りを捧げた後、皺くちやになった千円札を自動販売機に押し込む。しかし、自動販売機は皺くちやの千円札を受け付けず、何回入れても戻ってきてしまう。

心の中で、皺くちやの千円札を渡してきた姉を恨む。

結局麗一は一度自室に戻り、自分の貯金箱の中からお年玉でもらったピン札を持って、また自動販売機の元に駆ける。そして再び、父曰く自動販売機に住み着いているジュースの神様とやらの祈りを捧げ、ピン札を自動販売機に入れる。そして麗一は、一気に全てのボタンを押した。

俺は朝食を食べ終わった後に見つけた、母の置手紙に書いてあった大根と人参と、長ネギと玉葱と豆腐、それにカレーのルーをスーパーに買いに行った。家にいるとき一瞬眠ってしまったが、寝た一瞬後に思い出した置手紙のせいで、結局俺は『寝る』という街道から無理矢理拉致された。

我が家の絶対権力を握る母の言いなりになる気は無かったが、幼い頃に買い物に行くのを断ったときに、ロープで縛り付けられ、逆さまになって物干し竿に半日間つる下げられるという制裁をくらっ

た事があつたため、それからというもの、俺は母の『パシリ一号』
になっていた。ちなみに2号は親父だ。陽気で面白く、時に真面目
なことを言う俺と性格が瓜二つの（というか、俺の性格が親父に似
ている）親父も、見事に母の尻の下になった。

「はああ・・・」

ため息をついて、置手紙の上に置いてあつた千五百円を見詰める。
最近はため息ばかりだな、と思ったけど、それなりに疲れること
があるんだろうという考えで打ち消した。

と、その時。交通量の多い交差点の向こうで、麗一が何かをやっ
ているのが目に入った。

一瞬何をやっているのか分からなかったが、如何やら自動販売機の
ボタンを全部押そうとしているらしい。歩行者信号が青になったか
ら、俺は駆け足で横断歩道を渡る。そして、足まで使つて自動販売
機の全てのボタンを押そうとしている麗一に向かって声をかけた。

「おい、何やってんだ？」

一瞬ビクッ！と肩を震わせた麗一だが、顔を此方に向けると、「
なんだ、隼人か。」と安堵の息をつく。

「で、何やってんだ？」

「話が長くなるんだが、俺はこの中で最も美味しい飲み物を買つて
アネキに捧げないと、明日・・・いや、一時間後に生きていられる
保証が無い。我が家で絶対権力を握っている一人であるアネキに逆
らうわけにはいかないからな。で、アネキの味覚にそぐわない飲み
物を買つていつても、生きていられる自信が無い。とはいつても、
アネキの味覚にあう飲み物なんて知らない。だから俺は、親父が言
つてた『自動販売機の神様』に祈りを捧げて、ボタンを全部押して
出てきた飲み物をアネキに持つていくことにした。」

「でもお前、それである意味自滅技なんじゃ・・・？」

「そうだけど、俺には時間が無い！！・・・で、お前は何でこん
な炎天下の中で出歩いてるんだ？」

聞いてきた麗一に、俺は母の置手紙の話と、絶対権力の事を一部始

終話した。「なんだ、お前の家も権力者と奴隷がいるのか。同胞じゃないか。」といった後、ボタンを押そうと上げていた足を下ろした。「痛あ・・・」とやっていることから、如何やら足を攣ったようだ。

結局、足を攣った麗一の手助けをしているうちに、東側に傾いていた太陽は、完全に天の中心まで達してしまった。太陽の位置から見ると、もう正午に近いだろう。

昼までにかつて来い。と置手紙に書いてあったことを思い出し、麗一から「お礼」と手渡された滋養強壮剤を飲み干し、炎天下の下を全力疾走で駆けた。

家に着いたのは、ギリギリ12時前だった。台所に買ってきた材料を置くと、部屋に戻ってクーラーのスイッチを入れると、ベッドに倒れこんだ。

やはり、炎天下のしたで全力疾走をすると普段より疲れる。走っているときに、バトンのように握っていた滋養強壮剤のビンを塵箱の中に投げ入れる。ビンは塵箱から見事に外れ、壁にぶつかって硬質な音を立てて床に落ちた。暫くして、「ビンは燃えるごみではない」ということを思い出したが、まあ、外れて塵箱の中には入っていないからいいだろう。などと思い、気にも留めなかった。

母の作るカレーは、あり得ない味をしているということを、隼人は完全に忘れていた。

昼間買ってきた材料は、全てカレーの材料になる。

・・・恐ろしい。

目の前に置かれたカレーは、カレーではなかった。

いや、ちゃんとご飯にカレーのルーがかけられていることは変わり

はない。

ただ、ご飯にかかっているルーが、トンでもない状態になっている。ルーの中に入っている微塵切りされた長ネギと、銀杏切りの大根、それに、グチャグチャになって原型をとどめていない豆腐だと思しき物体は、夏休み前に給食で出た「カレー」には入っていないかった。

「おふくろ・・・」

今更だと思いながらも、恐る恐る母親に聞く。

「何？」

「これ、カレー、だよな・・・？」

「カレーに決まってんじゃない。ホラホラ、早く食べないとさめちまうよ。」

母が見守る中、俺は母作のカレーを口に運ぶ。

食べた事もない異常なまでの奇妙な味と、異臭が鼻を抜けた。

・・・それからのことを、俺は覚えていない。

「ね、ねえちゃん・・・？」

姉の部屋のふすまを、恐る恐る開きながら麗一は、姉に買ってきた（買ってこさせられた）飲み物を渡そうとしていた。
が。

「ねえちゃん言うなああ！！！」

という怒号と共に、中からシャープペンが銃弾のスピードの如く飛んでくる。

紙一重で避けた麗一は、後ろを振り向く。壁に、シャープペンが突き刺さっている。

「で、何？」

「飲み物。」

麗一が飲み物を差し出すと、姉はそれを受け取って一気に飲み干し

た。

「いい飲み物買ってきたね。・・・だけど」

「だけど？」

「帰ってくるのが遅おーい！！！！」

そして今度は、修正ペンが銃弾の如く飛んでくる。修正ペンは、麗一の頬を掠めて後ろの壁に突き刺さった。

頬から滴る真紅の生暖かい液体をそのままに、麗一は姉になんと言いつけるか考えていたが、途中で「コイツ（姉）に言いつけるのも無駄だ。」という考えが脳裏を過ぎたので考えるのをやめた。

第六章：同胞（後書き）

第六章です！！今回は、二人の夏休みの様子を書いた話になっています。次回は、麗一の前に、時間調整者の敵が現れます。多分、敵が現れてから、少しずつ話が盛り上がってくる・・・筈です。
ではーノシ

第七章：世界を食む者（前書き）

この話は、微微微グロ・・・のような表現が、文末にて表現されております。そのような表現が苦手な方は、観覧をお避け下さい。

第七章：世界を食む者

夜中。麗一は、『店』のある薄暗い路地にいた。

夏休みは一ヶ月と少しあるのに、随分と月日が過ぎ去るのが早い。いや、一日すら一瞬で終ってしまうような気がしてならない。

麗一は他愛も無い事を考えながら、目の前に現れた「敵」に、鋭い視線を送っていた。

彼等は時間調整者からは俗に、「ワールド・クラッシャー」と呼ばれ、時間調整者が世界を新しいものに移すのに対し、「クラッシャー」は、その邪魔をする存在――世界の移行を邪魔し、世界を滅ぼそうとしている。つまり、調整者の邪魔となるべき存在。

それが今、麗一の目の前に立っている。

敵が攻撃をしてくる気配はない。

ただ、緊張の糸を解いたら、敵が何をしてくるか分からない。麗一は腰に手を伸ばす。

だが、その手は虚空を掠った。

「ちっ……」

舌打ちをし、自分が時間調整者の正装ではなかった事を悔やむ。無装備のまま、戦えと言われれば戦う事はできる。が、素手で戦う事に慣れていなかった。

麗一は、学校史上最低の成績、『オールone』を繰り出したという、その伝説の脳ミソをフル回転させ、懸命な判断を下す。

麗一だって、無駄な戦いは避けたいと思っている。

此处は一度、この場を離れるか……。

麗一は、地を力一杯蹴る。敵の頭上を飛び越え、そのまま全力で細道を駆け抜ける。

しかし、麗一はそこで足を止めた。敵が背後で動く気配を感じたからだ。

慌てて振り返るが、クラッシャーが襲ったのは麗一ではなかった。

襲われたのは、金に汚い商売人がいる店。

「春日川つ……！」

麗一は叫んで駆け出し、丸腰のまま、砂煙を上げて瓦礫の山となった店の中に飛び込んだ。

『クラッシャー』は、どうして調整者の邪魔をしようとするのか。それには、幾つもの説が上がっている。その中で一番有力な説は、『復讐説』。

時間調整者が世界の中身を新しい世界に移し変える際、殆ど無い例だが古い世界のほうには、ほんの少し『残りカス』が残る場合がある。言い換えれば、『世界の中身』を一つの『データ』とした場合、『データの欠片』にあたる部分が『残りカス』。それは建物の一つだったり、道端に生えている一本の雑草だったり。そして勿論、人間や他の生物も、『残りカス』となりうる場合もある。

そしてクラッシャーは、『残りカス』になった人間の魂が具現化されたもの。クラッシャーは一人、古い世界に取り残され、そこで肉体が朽ち果て理性を失う。魂は本能的に自分の存在できる『世界』を求めて彷徨い、この世に入り込んできて、魂が人間の姿に形を変化させるのだ。そして、自分たちを新しい世界に連れて行ってくれなかった調整者に復讐をしている、というのが『復讐説』。調整者だって、自分たちの仕事で犠牲者が出るのは耐え難い事。だがしかし、それはどうしても、消す事のできない『つき物』。しかし、調整者だって仕事がある。その邪魔をしてくるクラッシャーを、放っておくわけにはいかない。悪いのはどう考えても調整者側だが、それは止むを得ないことだといえる。

麗一は、砂煙の舞う中、春日川を探した。春日川は能力を失っていない。だが、調整者として歩むのをやめたために、能力は一生封印される事になった。つまりそれは、封印している「鍵」を解かな

い限り、能力を失ったに等しい。クラッシャーは、なおも瓦礫の山となった店を荒らしまわる。

春日川は、レジのところでごつたりとしている。それが目に入るなり、麗一は春日川を抱えて、そのまま全力で地を蹴る。麗一の体が、重力を無視したように宙に飛ぶ。基本的に、調整者の身体能力は通常の人間の、約10倍なのである。

麗一が目指したのは、隼人の家。住民の屋根の上を、何の躊躇いもなく駆けまわる。

ふと、背後から感じる夥しい殺気に振り返る。其処には、先ほどのサラリーマン風のクラッシャーと、幼い少年の姿をしたクラッシャーがいる。

「ちっ・・・」

再び舌打ちをし、辺りを見回す。当然、仲間の調整者はいない。丸腰の上、気絶して動かなくなった春日川を庇いながら戦うのは、かなり大変だと言える。

麗一は屋根の瓦を蹴りながら、隼人の家の屋根を、前方に見つけた。

屋根を蹴る足に、力が入る。

スピードを上げ、麗一はそのまま大きく跳躍し、隼人の部屋と思しき窓に、そのまま突っ込む。

凄まじい音を立てて、俺の部屋に何かが飛び込んできた。

焦りながらも、飛び込んできた人物をみて、もっと驚いた。

「れ、麗一!？」

「前方の対象一人、能力を始動。解!!!!」

麗一は隼人の言葉を無視して、空中にすばやく、人差し指で円を描く。人差し指の先端から発される淡い光が、指に随って円を描いた。麗一は、円の中心を、隼人の額と合わせ、そこを一気に人差し指で突く。

麗一の人差し指が、俺の額を突いた。電気のような衝撃が全身に伝

わり、思わずその場に座り込む。

「な、何・・・を・・・？」

呂律のまわりが悪くなった口で、それだけを漸く伝える。

しかし、電気のような痺れは徐々に消えていく。

完全に痺れが消えたとき、体が軽くなった気がした。

いや、体重が軽くなったとかそんなことではない。まるで、空気と一体化したかのように楽になった感じがする。

「じゃ、後宜しく!!」

状況を読んでいない俺を放置して、春日川を部屋の隅に横たえ、麗一はそのまま窓から飛び降りていった。

「な、何じゃこりゃあ!!」

自分の姿を見て、思わず叫んでしまった。

いつもの体ではない。半透明に透けている。更に、服も見知らぬものを着ている。腰には、白銀に輝く日本刀。

割れた窓から外を見ると、二つの何かが、こっちに向かって飛んでくる。

本能的に、敵だと察知した。

剣術なんて知らないけど、とりあえず刀に手をかけ、窓枠を蹴る。

刀身が鞘を滑る音。二つの何かが、一刀両断される音。

「え・・・？」

時代劇の見よう見まねで刀を鞘から抜いて、そのまま横に振っただけ。

それなのに、『二つの何か』は真っ二つに裂け、屋根の上に転がっている。

——俺、剣術なんて知らねえぞ?!?!?

焦った俺の目に入ったのは、真紅の液体がべつとりと付着した刀身。

「ぎゃあああああ!!!!」

本来なら、斬られた対象が出すような悲鳴を上げ、そのまま刀を投げた。

投げられた刀は空を切り、再び起き上がろうとしていたサラリー

マン風の人間の脳天を、見事に突いた。

「うおおおおおおお！！！！」

断末魔の叫びを上げ、サラリーマン風の人間が光の粒子となって消えた。あとに残ったのは、白銀に輝く刀だけ。

「き、消えた！？！？」

と、その時。二つに引きちぎれていたはずの、幼い少年の体が再びくつついていくのが目に入った。

「うわああ！！！！なんだコレ！！！！」

ギアアギアとわめく俺。胴体がくつついた少年は、素早く拳を突き出してくる。

「うわっ……」

紙一重で避けた。が、少年の拳に触れた髪の毛が、数本宙に舞う。

少年は攻撃をやめることなく、俺に向かって突進してくる。

「ち、ちよつと待てよ！！！！俺が何したって言……ぎゃああ！

！！」

少年は、俺の言葉なんて聞えないというように問答無用で攻撃を繰り返す。

12分がたったころ、俺はもう避けるだけで攻撃をするどころではなくなっていた。それに加え、体力も底を突き始めている。

「だ、誰か助ける！！！！疲れた！！！！疲れて死ぬ！！！！」

ヤケクソで叫んだ俺。まさか、次の瞬間に言葉が返ってくるとは、想像もしていなかった。

しかし。その言葉は、俺に向けられているわけではない事を、一瞬後に悟る。

「千万の魂を従える者よ、千万の世を培う者よ。その力を我に授け、不浄なる魂を滅せよ。」

隣の家の屋根から、麗一が自身の前で構えた、ファンタジックな槍の先に青白い光が集まる。

「天地の境に立ち、汝、彷徨える魂を導くがいい。」

最後に一言、唱え終わると檜の先から光が放たれる。光は、少年の腹を貫通し、そのまま彼方、夜空に消えた。

少年が光を放ち、先ほどのサラリーマン風の男同様、光の粒子となって消えた。

麗一はそれを見届けると、隣家の屋根から、俺のいるところまで跳んでくる。

「随分とボロボロじゃないか。」

「悪いかよ！ーっか、オマエがさっきのヘンな奴らを俺に押し付けて、どっか行っちゃまうのが悪いんだろ！？」

「まあ、そのへんは忘れろ。で、お前・・・」

「・・・？なんだよ。」

麗一は暫し考え込んだ後、

「お前、俺のねえちゃん的能力を引き継いでるな。」

衝撃的な事実を伝えた。

「はあああああああ！?!?!?!?!?」

「まあ落ち着け。」

第七章：世界を食む者（後書き）

今回は、私の苦手でどうしようもない戦闘シーンが出てきました。戦闘シーンは、もう戦っているのかも分からないような有様ですね・
・ or z 精進します・・・

そして同時に、呪文を考えるのも、あまり得意ではありません。読者のみなさん！！！！「これぞ！！」という呪文や、戦闘シーンの表現の方法がありましたら、感想にて募集をしていますs（以下略

と、いうワケで第七章ですね。これから、もっと私の苦手すぎる戦闘シーンがB A N B A N ^{バンバン}出てきます。読んでいるのが面倒くさいor飽きた、という人も、既にいるんじゃないかと思えます。ですが、基本的に私は執筆中の小説は、完結させてあげるのが小説に対する『ギリとニンジョウ』ってヤツなんだと思います。なので、精進しつつ、頑張っていこうと思います。ということですが、いつも以上に後書きが長くなってしまい、すみません。それでは、次話でお会いしましょう。

第八章：研修開始

「時間調整者が能力退化以外の理由で、能力を使用しなくなった場合、あまりの能力はランダムで誰か他人に移る。俺のねえちゃんも時間調整者の能力が無くなる前に調整者を辞めたんだけどな、如何やらその能力がお前に芽生えたらしい。」

「マヂかよ……で、なんで俺の能力が麗一のねえちゃんと同じだつて分かったんだ？」

「お前のその……白銀の刀——『神風』が、昔ねえちゃんが使ってた刀と同じなんだ。時間調整者の武器は、誰かと同じになることはあり得ないらしい。」

「へえ……」

「それにしても、今回のあのガキ、どうやら『複数魂合体』だったらしいな。最近は厄介なのが增えたぜ、全く。」

「ふくすつこんごうたい？」

「ああ。古い世界に残された魂が、この世に降り立つ前に他の魂と合わさり、更に力を得たクラッシャーのことだ。」

麗一は、自分に向かって素早く印を結ぶ。と、麗一の体が、半透明のもののから元に戻っていく。

「そうだった、お前にコレをやる。覚えとけ。」

そう言つて麗一が俺に渡したものは、少々ボロい教科書ほどの厚さの本。表紙には、『調整者呪文一覧表』と書いてある。

「何コレ？」

「いや、さつき出かけたついでに、春日川の店から持ってきたんだ。お前だつて、もう調整者なんだから術の呪文くらいは覚えておいたほうが絶対役立つ。」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんだ。」

俺は、一覧表をパラパラとめくつて見る。其処には、ビッシリと細

かい字で、呪文だと思われる文章が書いてあった。

「うわぁ・・・」

勉強の教科書だって数分見てるとクラクラするのに、こんなのを一日中見てたらぶっ倒れるかもしれない。

「・・・ま、頑張れ。俺もとりあえず、その教本の265ページ7行と8文字は覚えた。」

そう言つて麗一は、屋根の上から降りていつてしまった。どうして呪文を覚えるのではなく、何ページと何行・何文字目を細々と覚えているのかは、恐らくこの呪文を全て習得するより難しいことだろうと思つた。そして、それが実は、麗一が出鱈目に言つたということに気付く事は、断じて無いだろうと思つた。

翌日。夏休みとは、やはり時間が過ぎるのが早くなつた気がする。この間、8月に入つたな、なんて思つていたら、もう盆。手付かずの宿題は、7月の時から変わらず机の上に山積みにしてあるだけ。

夏休みに入る前の朝礼で確か、校長先生が『時間というもの、常に一定の速さで流れており、全ての人間には平等に時間が与えられている。』とかなんとかつて、小学生じゃ理解しがたい（特に低学年とか。）内容をベラベラと長く語つたような気がするが、それはウソなんじゃないかと思つていた。前日の夜、海外旅行から帰つてきた友達から電話がかかつてきて、その時に宿題は何処まで終つたか、と聞いたところ、夏休みが入つて3日で全て終らせた、と言つていた。同じ時間が与えられているのに、俺は宿題手付かず状態。友達は既に終了し、宿題という名の束縛から解放された。

さり気無く、机の上に積んである宿題の問題集を手に取り、パラパラとめくつてみる。

其処には、小1から小6までの、総合問題がビッシリと載つていた。

「うう・・・」

眩暈がする。昨日渡された呪文を覚えるのだって無理に等しかつたのに、更にこんな問題を、あと2、3週間で終らせなければならな

い。卑怯なヤツなら、「答えを見てジャンジャン進めるぜ!!!」なんて思うだろうが、我が家ではそのような卑劣行為をしないために、親が答えを預かる事になっている。

ますます眩暈がする。別に答えを見ようと思ったわけではない。というより、見てしまつては非常にヤバイ。答えを見て怒られるより、夏休み明けにあるテストの点数が悪いほうが、もっと怒られるからだ。それだけは回避しなくてはならない。そしてそのテストは、夏休みの問題集を確りやっていれば、点数は確実に取れる事は約束されているような内容らしい。

なおさら、答えを見るわけにはいかない。

さらに強い眩暈を感じ、ベッドの上にへたり込む。この行き先が暗黒の闇で覆われている俺の未来は、一体どうなっているのか、怖かった。

と、その時。夏の暑さでダウンしていた俺の脳ミソが、フル回転を始めた。

・・・確か麗一は・・・春日川を連れてきたときに市内中学校の夏服を着ていた。〓中学生〓俺より宿題の問題を早く終らせる事ができる（かもしれない）。〓麗一に宿題をやってもらつ。

おおお!!! 何たる論理的解決法!!!

宿題の山を、近くに落ちていたナツプザックに、すべて詰め込む。

庭に放置してあつた自転車にまたがり、漕ごうと思つたとき、自転車のタイヤの空気が抜けていることに気付く。すぐさま物置に走り、片隅で寂しそうにしていた空気入れを引っ掴むと、庭の自転車に戻つた。電光石火の速さでホースを自転車につなぎ、握り手を思いつきりポンプに向かって下ろした。

プシューウ・・・

情けない音が鳴つた。

「??」

不思議に思つた俺は、何度も空気入れでタイヤに空気を送つたが、どうしても情けない音が鳴り、自転車のタイヤに空気が入っていく

感がない。

空気入れに問題があるのか？と、空気入れのホースを見てみる。
が、コレといった疵は特についていない。

じゃあ、自転車のタイヤか？

自転車のタイヤを見て、原因が分かった。長期に渡り放置されていたタイヤのゴムは劣化し、ひび割れている。

「なんだよ・・・これ・・・」

がつくりと肩を落としかたが、この間塾に行ったときの自転車があるじゃないか！！と、物置に奔る途中、塾に行ったとき、麗一に店に連れていかれたため、帰る時は徒歩だった事を思い出す。つまり、自転車は目的地である塾に置き去りにされている。

「マジかよ・・・」

再び肩を落とす。時間調整者の身体能力が、通常の人間の10倍とかつて、呪文一覧表の『時間調整者とは』というカテゴリーに書いてあった気がするが、俺には自分から時間調整者になる方法を知らない。故に、その並外れた身体能力を生かして本部まで直行する事は、まず無理だということになる。

実際、昨夜は、部屋に戻ったらもう普通の人間に戻っていた。今だって、時間調整者の、あの透けた体ではない。

全てのヤル気が一気に失せ、それはきっと全世界でも俺しか発病しない伝説の『8月病』だ、という結論を勝手に作った。ちなみに8月病とは、五月病の症状が8月になって現れるというものだ。

重い荷物を持って、1.5km先の塾まで通うなんて、絶対にイヤだ。しかも、外は9日連続の炎天下。

ここは大人しく、エアコンのきいた部屋でアイスでも食べながら、漫画でも読んでいるべきか。

うっん・・・

と、その時。突如として、背後に置いてある電話が音をたてた。

一瞬体を、ビクッ！！と震わせ、オドオドと受話器をとる。

「も、もしもし、桃倉ですけど・・・」

『隼人か。麗一だけど。今から『本部』で定例会議を始めるんだ。お前も来いよ。』

「本部？」

『ああ、あの塾の事だ。ちなみに、定例会議つてのは時間調整者が、一週間に一度行う会議。で、お前も時間調整者としての能力が発動したんだから、定例会議に出席するのは当たり前。』

「ちょ、待てよ!!」

『何だ？』

「いやだつて、・・・・・・・・」

『何だよ。』

「いや、やつぱりいい。・・・それより、どのくらいで終わるんだ？その、会議つてのは」

『うーん、15分から25分つてとこだな。』

「なんだ、結構短いんだな。」

『まあな。じゃ、待ってるから来いよ。あと、持ち物は呪文一覧表だからな。』

そっぴい残し、プツツ、という小さい音と共に電話が切れた。後に残るのは、プー、プー、プー・・・という空しい音だけ。

自室に戻り、先ほどのナップザックから宿題の冊子を全て放り出す。変わりに、一冊の薄い小冊子——呪文一覧表を入れる。結局、自転車は使えないから歩いていくことになるだろう。

『本部』に行く途中にある自動販売機で、ジュースでも買っていか。薄くて軽い財布もナップザックの中に入れて、階段を下りた。

第八章：研修開始（後書き）

さて。この次の話から、主人公の本格的（？）な研修生活が始まる予定です。

と、そんなことより。学校が終って帰宅する途中、時々通学路で近所の人に、「おかえり」って言われます。返事を返そうと思っていたのですが、相手は近所のお爺さん。普通に生活する上では、接点など何もありません。なので、「ただいま」っていうと、何だか馴れ馴れしい感じがして、相手に対して失礼かと思い、「こんにちは」と言おうとしました。しかし、「おかえり」といわれたのに対して「こんにちは」だと、何だか会話が成り立っていない感じがし、考え込んでいる途中、自分が難しい顔をして立ち尽くし、近所のお爺さんが不思議そうな顔をして私のほうを見ていました。慌てて「さようなら！！」といい、自宅へ帰るといふ、少し恥ずかしい体験をしたのがついこ間。皆さんはこんなとき、どういう返事をしますか？

追記：長々とスミマセン……

第九章：研修と過去の欠片

「それにしても、この部屋は快適だなあ。」

会議の五分前。会議室（といっても普通の教室なのだが）には、5人の時間調整者がいた。彼らは、椅子に座って漫画を読んだり、お菓子を食べたりしている。寝ている者もいる。

「ご、ごめん、遅くなった・・・」

息が途切れ途切れの隼人が会場に入ってきた。麗一は、読んでいた漫画を閉じる。そして、「まだ五分前だ。遅れじゃない。」といった。

「さて、会議なんだけど・・・」

麗一は、漫画を読みながら言う。銀髪の少年——恭助が、「僕は伝える事は特に無いよ。」という。それには、周りの人々が「同意」といった。こいつらも日常的に、クラッシャーと戦っているのだろうか？

「で、麗一さんからは、何かあるんですか？」

茜色の髪を後ろで一つに縛った少女、英子が、麗一に聞く。

「ああ、それなんだけど、先日、複数魂合体がいた。みんなも気をつけるよ。」

その場にいたものは、適当に返事を返し、読書したり御菓子を食べたりと、自分のことに専念していた。

「・・・おい、」

漫画から、面倒くさそうに顔を上げた麗一が俺のほうを見て言う。

「これ、本当に会議だよな？」

「ああ、もう終わった。」

「は？」

「だから、もう終わった。」

「・・・」

思わず沈黙してしまった。全て一分以内に終了している。確か電話では、15分から25分くらいって言うていた筈。

その時。麗一は何を思い立ったか、「そうだったあ！！！」と叫んで、物凄い勢いで読んでいた漫画を閉じた。

「何だよ、騒々しい。」

鬱陶しそうに見てやると、麗一は俺の襟首を掴んで部屋の外に引きずり出し、そのまま問答無用で階段も下りていく。地上のホールの入り口が見え、恐らく本部の外に行くのだろうと思った。

が、その予想は大いにはずれ、麗一はなおも地下に続いていく階段を、ひたすら折り続けた。

そして俺たちはやがて、大きなホールに辿り着いた。

「何処だよ、ここ。」

辺りを見回しても、ホールには何も無かった。天井はとても高く、どれくらいの高さがあるかは計り知れない。真っ白な立方体の形をした空間だった。

「何処って、訓練場。」

「訓練場？何をするんだよ。」

「決まってるだろ、修行だよ、修行。」

「シユギヨウ？」

麗一は持つてきていた二冊の漫画を開き、その場に座った。

「まあ、修行ってのはちよつと言いすぎかもしれないな。・・・研修、のほうがあつてるかも知れない。」

「いやだから、何の研修なのかって聞いているんだけど。」

「何って、勿論呪文の暗記と発動。それに、武器を使つての擬似戦闘。お前、今日呪文一覧表持つてきてるだろ？」

「まあな。」

「じゃ、とつとはじめるぞ。会員も揃ったとこだしな。」

後ろを振り返る麗一。其処には、調整者の姿をした、会議のメンバーがいた。

「で、お前、何処まで呪文覚えてんだ？」

「何も。」

「何も、って事は、何も覚えてないんだな？」

「ああ。」

麗一は大きくため息をついて、俺の手から呪文表を取る。そしてパラパラとめくりながら、

「お前、回復系の魔術と攻撃系の呪術、どっちがいい？」と聞く。そんなこと言われても。

「じゃ、サンプルで見てみるか？」

「あ、それたのむ。」

麗一は後ろを振り返り、恭助を呼ぶ。

「きよーすけー！！ちよつとこつちに来い！！」

恭助が駆けてくる。まさか・・・

「じゃ、そこ立ってろ。動くなよ。逃げるんじゃないぞ。」

あれこれと恭助に注文付け、麗一は昨夜と同じ呪文を唱えた。青白い光が、恭助を貫く。

麗一はすぐさま、別の呪文を唱えた。

「千の魂を癒す者よ、千の魂を管理するものよ。負傷した魂を回復へ導き、魂の決壊を防げ。」

唱えると、恭助の体が薄緑の光に包まれ、攻撃魔法を受けたときの怪我が物凄い速さで治っていく。

「おおー」

思わず、感嘆の声が口から漏れる。

「今のが、初歩呪術と初歩魔術。上級呪術や上級魔術になれば、世界を滅ぼす事だって、廃墟になって生命の息吹が果てた世界を回復させ、命を再び芽吹かせる事だって可能だ。」

それから麗一は、「ま、上級術を使いこなせるようになるのには、最短で5年の鍛錬が必要だけどな。」と付け足した。

「じゃあ、次は剣術だけど・・・お前、刀使ったことある？・・・って、無いよな。現代人は一度も武器を手にはせずに死を迎えるヤツだっているだろうし。」

「包丁くらいだったら、家庭科の調理実習で使ったぞ。」

「包丁は武器になるけど、それは謝った使い方だろ。」

麗一は腰の鞘から刀を引き抜き、それを床に突き刺した。甲高い金属音が響く。

「最初は使ってみるのが一番早いかな・・・と、いうわけで隼人とりあえず俺と手合わせでもしないか？」

「え？」

「まあ、焦る気持ちも分かるけどな。」

「いやだって、そんなので斬られたら確実に死・・・」

「ああ、その点は安心しろ。死にそうになったら魔術で回復させてやる。」

一応安堵のため息をついておいたが、内心では全く安心していない。そんな俺の心情を見透かしたのか、麗一は続けた。

「調整者の衣服や武器は特殊だな。特に誰かの能力が芽生えた場合、前に使っていた調整者の戦闘能力や精神力を、ある程度記憶しているんだ。そしてその武器や服装は、元々アネキのものだ。俺のアネキは・・・いや、なんでもない。とにかく、武器にはある程度の戦闘能力が備わっているから、独自の戦闘法を見出すまでは、お前はそれに従えばいい。ほら、さっさと抜刀しやがれ。」

麗一に促され、渋々刀を鞘から抜く。

「ああ、忘れてた。その刀、持ち主の思うがままに攻撃力を調整できる宝刀だから、重宝しろよ。」

「え？」

「物分りの悪いヤツだな。つまり、刀を持った者が、『最強の攻撃力がほしい！』って願ったとする。そしたらその刀は、その意思に反応して、この世で最強の攻撃力を持った剣となる。」

「それってつまり、持ち主の意思で如何とでもなるってことじゃねえか。」

「早い話はそうだ。」

恐ろしい。麗一がアネキに逆らえない理由が分かった気がしたが、よく考えれば麗一の姉は、既に能力を失っている。

「・・・ということ、実戦を開始する・・・んだけど、お前、刀剣から記憶を読み取るなんてこと、出来ないだろ。」

「失礼だな！！初めてなんだから知らなくて当たり前だろーが！！」

「はいはい、それは失礼しました。」

「で、どうやるんだよ、それ。」

麗一はアゴに手を添え、『考えるポーズ』になった後、ゆっくりと口を開いた。

「いや、説明するのが難しいんだけどな、なんていうか・・・精神を統一して、刀剣に意識を集中させて、情報を聞き取る感じで・・・」

「よくわからん！！」

「ンなこたあ知らねえよ！！俺は、既に自分の能力が開花した状態で長にさせられたんだ！！どうやるかなんてわかんねえよ。」

「能力が開花・・・？」

麗一は色々と大変だな、というところ、麗一が、「おい、月末・・・いや、清水！！隼人に記憶の読み取り法を教えてやってくれ！！」と叫んだ。駆け寄ってくる清水いりえ。

いりえは、肩にかけていた弓を傍に置き、その場に正座をした。つられて俺もその場に座る。

「どこから話せばいいのかわかりませんが・・・」

そう前置きをして、いりえは話し始めた。いりえが言うには、武器を持ったまま意識を集中し、そのまま相手に攻撃の態勢をとっていれば、それだけでいいのだという。

「これでいいのかな・・・？」

不安そうないりえ。安心しろ、お前の説明のほうで麗一の説明より数万倍マシだ。

麗一が近付いてくる。

「よしつ。わかっただろうから早速実戦だ。」

「ええ!？」

「いゝのいゝの。もゝまんたいゝ（問題なし）」

「よくねえよ!!つつか、問題ありすぎたるこの場合!!」

麗一に引き摺られながら、文句を突きつける。が、麗一はお構いなしに引き摺り続ける。

「さて。この辺でいいかな。」

広場の真ん中辺りで、麗一は俺を放した。

そして本人も、俺から数メートル離れて刀を構える。

仕方なく、自分も武器を持つ手に意識を集中する。

瞬間、アニメのセル画のように細かく、鮮明でハッキリとした『キオク』の映像が脳裏に流れた。

——しとしとと降る、冬の冷たい雨。

——血を、その体から流して横たわっている少年。

そしてそれを見下ろす、氷のように冷たい瞳。倒れている少年の髪の色は、黒。

刀を持つ手が震える。

「なん・・・だよ、今の・・・」

集中していた意識は、蟻の集団を蹴散らすかの如く、散ってしまっ

た。
全てを知っているかのように、麗一はただ、無表情でその場に立っていた。

第九章：研修と過去の欠片（後書き）

第九章になりました。これから先、主人公は驚くべき事実を知ることになります。たとえば、麗一が・・・とか、春日川の・・・は、実は・・・などなど。それと、わかっているとは思いますが、『春日川』って『かすがい』って読むんです。では、これからも宜しくお願いします。

第十章：戦いの序幕

暗い廊下を、数人の人、いや、クラッシャーが歩いている。

彼らは、クラッシャーの中でもより優れた、高等種類に分類される、『ハイ・クラッシャー』と呼ばれているクラッシャーである。

先頭を歩いているのは茶髪の、10代前半の・・・いや、見方によつてはまだ二桁の年齢にもなっていないような幼顔の少年。後に続くのは、どれも大人の顔つきと見られる。

「長谷川統括長——。」

後ろを歩いているハイ・クラッシャーの一人が、先頭を歩く幼い長——長谷川知樹に訊く。

「何？」

長谷川は、感情の読み取りにくい声で返答する。

「今日をつけられている、『桃倉隼人』と周囲の調整者を撃退し、統括長は一体何をされるのでしょうか？」

長谷川は、機嫌を損ねるわけでもなく、明るく答える。

「そういう個人的な意見は、個人で聞きにきてくれないかな？僕はコレでも結構暇だね。部屋では連日相談委員をやってるから、気軽に話しに来てよ。」

「はぁ・・・失礼いたしました。」

彼らの身を包んでいるのは、漆黒の衣。腰や背中にかけた肩紐などには、其々の武器だと思しき、剣や大太刀などがかかっている。長谷川も、腰に長刀を差していた。

やがて一団は、一つの立派な扉の前まで来た。

「いいかい。此処をくぐれば、すぐに現世である『今の世界』に出る。そしたら、すぐに計画を実行してくれ。」

長谷川は、扉をそのまま開け放った。目映いほどの光が、彼らの視界を覆った。

「おい、どうした。」

一向に攻撃をしてこない俺を怪訝そうに見て、麗一が構えていた刀を下ろす。

『神風』を持っていた主は、茶髪の小柄な少年だった。身長から見ても、大した年齢ではないだろう。

「いや、何でもない。」

眩暈のする頭を駆使し、今流れ込んできた映像を自分的に解釈する。

あの倒れていた、血まみれの少年は恐らく麗一だ。しかし、もしそうだとすると麗一は既に死んでいることになる。では、今日の前にいる麗一は何者なのか。そして、茶髪の少年は誰なのか。麗一と茶髪少年の間に、何があったのか。

全然解釈じゃないじゃん、と思い、考えるのをやめた。今考えなくても、其の内分かるかもしれないと、心の中で密かに思った。

「そうだ、春日川、元気にしてるのかな。」

あの夜、結局春日川は目を覚まさなかった。病院に連れて行って、一々事の事情を説明するのが非常に面倒くさかったのと、常人には恐らく、時間調整者などということは理解不能なのではないかと思い、本部の医務室で目が覚めるまで寝てもらう事にした。

「なんだよ、心配なのか。」

「ばっ……！！！！ちげえよ、何で俺があんなヤツのことを一々心配しなきゃなんねえんだよ！！！」

「焦るところが怪しい。」

典型的なツツコミを入れてやると、「むひー！！！」と叫んで刀を振り回してきて危なかったので、とりあえず首の後ろを手刀で打つ。麗一は「ぐふっ」という、鈍い声を上げてその場に倒れ付した。

駆け寄ってきた調整者たち。其の内のひとり、中村英子が、「この様子では、麗一さんも医務室行きですね。」といった。異議はなかった。

その夜。満月が、ちょうど夜空の天辺に来た頃、春日川は目を覚めました。風の音がする。強風のような。隣のベッドには、何故か麗一が寝かされている。寝ている麗一を見てみると、どうしてもあの記憶——自分を助けるために命を落とした、当時11歳の幼い黒髪の少年の記憶が蘇る。頭を振って、その記憶を脳内から一時的に消す。ベッドから音を立てないように降り、備え付けの小型冷蔵庫から飲料を取り出し、そのまま飲む。

そのままベッドに戻るのも寂しいかと思っただため、春日川はカーテンを数センチずらし、外の様子を伺う。

その時、春日川は見た。空に一筋の閃光が迸り、その裂け目から黒衣の集団が出てきた事を。

そして、その先頭に立つものには見覚えがあつた。いや、確実に知っている。

「知樹……」

春日川の呟きは、闇の中に消えた。

「ど、どうして知樹が……」

春日川は、立ち尽くして震える事以外、何も出来なかつた。

あの後俺は、残った調整者の特訓に付き合わされて散々だった。

まず、剣術の練習。「イメージして、すこしは出来るだろう」と聞かれたが、「わからない」の五文字で返してやったら、見事に初歩の初歩から特訓させられた。更に次は、呪術の基本中の基本である魔方陣、『円陣』、中級呪術の魔方陣の『方陣』、そして最後に、初級者なのに上級呪術の陣である『方円陣』まで学ばされた。

家に帰る足取りは、依然として重いまま。一氣にいろんなことを覚えさせられたからか、脳ミソも身体同様、水を含んだ衣服のように重かつた。

家のドアを、疲れて震える手で開く。中から生ぬるい空気が流れ

てきた。

部屋に飛び込むやいなや、クーラーのリモコンを手を取った。一瞬、これじゃクーラー病が治らないなという言葉が頭に思い浮かんだが、暑いんだからしょうがない。

クーラーの設定気温を最低にして、ベッドに倒れ伏せる。

目蓋が、躊躇無く降りてきた。

第十章：戦いの序幕（後書き）

えつと・・・第十章です。コレからどんどん盛り上がっていくと思うんですが、話が進むにつれて流血表現が多く・・・つまり、グロくなるかもしれないのです。私の書く流血表現は過激なものではないと思いますが、前書きに書くようにしますので、苦手な方は読むのを控えてください。では、次話でお目にかかりましょう。

第十一章：戦いの序幕ⅠⅠ

黒衣を纏った集団は、一直線に隼人の家に向かっていた。

春日川は、成り行き上隼人の家に入ったことがあったため、その方向と位置は把握していた。

「あかな、あのままじゃ・・・かといって、アタシは術を使えるわけでもないし・・・」

と、その時。春日川の視界の隅に、気絶している麗一の姿が映る。

「これや！！コレやで！！！」

傍らに立てかけてあった、柄の長い箒で気絶している麗一を、容赦なく突く。

しかし麗一は微動だにしない。

機嫌を損ねた春日川は、箒で麗一をビシバシと叩き始めた。苦しそうな声は上げたが、まだ目を覚まさないで、今度は自ら攻撃をすることにした。昔、小学校1年生のときから小学校6年生のときまで、柔道と空手を習っていたという経験がある。中学になってからは部活が忙しくて辞めてしまったが、時々思い出せばイメトレなどをしていた。

強烈な正拳付きを腹に食らわしてやると、麗一は「がふっ」という聞き苦しい声を上げて目を覚ました。

「なんだ、春日川か・・・なんだよ、こんな夜更け・・・」

不機嫌そうな麗一は、窓の外、夜の世界を横切る黒衣の集団が目に入るなり言葉が途切れた。

「お、おい、あいつ等まさか・・・」

「その、まさかのようやで。ほら、とつと行つて、こっちの最大戦力となりうる隼人を助けださんと、今度こそ世界は奴らの手におちるで。」

麗一は春日川の言葉を無視したように、調整者化——『精神体』化して窓から飛び降りた。

調整者の精神体化というものは、任務を果たすときに調整者の姿になることを指す。この、調整者の姿、というのが即ち、人間でいう『精神』にあたる部分で、調整者は常人より精神力に長けていて、肉体から精神が離れてもそのままの姿で存在する事ができるのだ。

麗一は、黒衣の集団に見つかからないよう夜の闇に包まれた道路を全速力で駆け抜ける。

黒衣の集団は、隼人に危害を加えるつもりだと、麗一は予想していた。

最悪の場合は、隼人は……。もしそうでなくても、ただですまされるとは想像していない。

羽織っているコートに似た服の、長い裾を翻して隼人の家の屋根に跳ぶ。

黒衣の集団も、此方に気付いたようだった。

ゆっくりと黒衣を翻して近付いてくる少年に、麗一は見覚えがあった。

「長谷川・・・知樹・・・」

相手は近付いてきながら、ゆっくりと口をひらいた。満月の逆光でシルエツトしか見えない。

「やあ、覚えていてくれたようだね。」

「誰が忘れるか、ボケ。俺はそこまでバカじゃない。」

「おや。じゃあ、春日川由香を庇って・・・・・・は、誰だったかな？」

強風のせいで、言葉の途中はよく聞き取れなかった。が、麗一はもう、なんと言いたいのかわかっていたようだ。

「相変わらずだな。ガキのころから反射神経と防御力の鋭いやつなんか、何処にいるんだよ。」

「それもそうだね。考えが甘かったようだ。」

「はっ。・・・で、今日は何をしに来た？」

長谷川の目が鋭くなる。

「言わなくても分かってるんだろ。」

鋭くなつた長谷川の視線など気にしていない麗一。

「まあな。」

「だったら、訊かないでくれよ。僕は分かりきっていることを訊かれて答えているほど、ヒマじゃないんだ。」

恐ろしいほどの殺気が、長谷川を中心に放出される。

「ああそう。だったら一つ言わせてもらおう。」

「なにかな。手早くしてよね。」

「失せろ。俺は重要人材をお前らに引き渡すきはねえ。」

殺気の濃度が、増す。

「そう。それは残念だったね。じゃ、強行突破といかせてもらおうよ。」

腰の長刀には手をかけず、身体をすっぽりと覆う黒いマントの中に、手を引っ込めた。

麗一は、腰の刀に手をかけ、相手の攻撃が来ると同時に刀を引き抜いた。

硬質な音が、夜の街に響いた。

「・・・反射神経が鋭くなつたもんじゃないか。」

「・・・うるせえ。俺も『先代』から色々の特訓（若しくは虐待）を受けたんでな。」

相手が持つているのは、刺身を裁くときに使うような刃渡り15センチほどの刃物。

麗一からみれば、それは簡単に振り払えるものだった。が、刃物は予想以上に強力な力で振り下ろされているらしく、刀を上げることもし下げることができなかった。

相手は、片手で更に何かを、黒マントの中から出した。

何かのスプレーのようだった。目を凝らし、よく見るとそれは。

「Good night。」

目の前での噴射音。白い煙が、視界を覆う。
襲い来る睡魔。

「そんなの・・・って・・・ありかよ・・・卑怯野郎・・・」

長谷川は、屋根の上に倒れた麗一を、冷ややかな目で見下ろした。

「戦いにおいて、卑怯なんて言葉は存在しない。あらゆる手段を使い、ただ勝利を掴み取るだけのこと。君の先代は、そんなことも教えてくれなかったのかい？」

背後に控えている部下に、視線もくれずに告げる。

「桃倉隼人の拉致の件は無しにしよう。いいことを思いついたんだ。」

部下は何も言わない。

「桃倉麗一を使う。」

強風に吹かれた上空の雲が、満月を隠した。

第十一章：戦いの序幕ⅠⅠ（後書き）

というわけで、十一章です。なんだか、戦いの序幕とかいう題名なのに戦いの気配すらないですね^^;;

そんなことより、これから少々設定がややこしくなる・・・かも知れませんが、悪しからず。

では、この辺でお暇しておきます。いつも読んでくださる読者の皆様に感謝しつつ、これからも宜しく願います。

第十二章：突入I

目が覚めたそこは、自分の記憶には無い場所だと思って、そのまま麗一はじつとしていた。

「ここは・・・何処なんだ。」

無意識のうちに、言葉が口から漏れる。

「やあ、目が覚めたようだね。」

長谷川の声が聞え、麗一はそちらを向こうとした。刹那、体に物凄い痛みがはしる。

「うつ・・・」

粘り気のある音をたてて、血管の中を何かが流れていく。

辛うじて動く眼球で、自分の周りを見渡す。薄い紫色の液体の中に、自分は居た。水分につかっているのにも関わらず、視界がはつきりしているのが不思議だと思った。息も苦しくない。先ほどから見えていた空気の塊は、気泡だということが分かった。次に、自分の体を見てみた。幾本もの管が肩や首筋、腹に繋がっていた。不思議と管が刺さっている場所は痛くなかったが、ボンヤリとした脳では、驚くことすらままならなかった。

管がささっているところは痛くなかったが、体中が鈍痛に見舞われていた。ハッキリしない、ボンヤリとした重い痛みは、僅かに体を動かす事によって大きく倍増される。

「心配しなくていい。君には、僕らに色々と協力してもらってからね。だから、もう少し待ってて。」

語尾が、薄れていくように思えたが、薄れているのは自分の意識だった。再び襲った睡魔に、瞼を閉じた。薄れていく意識に残ったのは、体中を駆け巡る鈍痛と、血管の中を通る粘っこい音だけだった。

朝。寝相が人間離れしたほどに悪い俺は、自らの寝返りでベッド

から転げ落ちた。

「・・・つてえ!!」

頭を床に打ち、奇妙な悲鳴を上げて、自分自身の悲鳴で目が覚めた。自分の寝相の悪さもどうかと思う。思い起こせば5年生のときにあった2泊三日の林間学校も、広い部屋で男女別れて、大勢で寝た。一日目の夜に、俺の隣で寝ていた奴に、俺の放った蹴りと正拳突き（もちろん寝相）が顔と腹に直撃して、2日目は医務室で寝込んでいたことがあったらしい。二日目の夜は前夜のことがあったせいか一人、部屋の隅に追いやられて寂しく寝ていた。

つと、そんなことはともかく。昨夜、天井の上から物音がした気がする。しかし毎日見る夢はどれも奇妙なものだから、昨夜の夢が妙にリアルだったという可能性も否定できない。

が、夢の内容は、朝にはさっぱり全部忘れている。リアルな夢だったのかもしれないけど、内容を思い出せない限りはどうしようもない。

いや、やっぱりこのことを考えるのはやめよう。夢なんか思い出そうとして思い出せた例が一度もない。自慢じゃないが、記憶力は異様に悪かった。

随分と遅い朝食を食べるために、リビングに下りていく。テーブルの上には、ラップに包まれた皿がひとつ置いてあるだけだった。今日もお袋は久々の町を満喫しているのか、バーゲンセールか何かが、どこかのスーパーで実施されているのか。確率的には後者のほうが上だな、と思った。

ラップに包まれていた朝食を食べ、今日もなんとなく本部へ向かう。途中、海外から帰ってきた友人と会った。「お前、日焼けしたな。」「そりゃあ勿論、海で泳いできたからな。そういうお前は真っ白じゃねえか。ロクに外に出て遊んでなかったことがまる分かりだぜ。あ、それと、宿題は早めに終らせたほうがいいとおもっから、さっさとおわらせとけよ。じゃあな。」「などという話をしてから、

また歩き出した。今考えれば、俺が宿題をやっていないことなど、長年の縁で分かるのだろう。

今日も太陽は、はりきって地上をガンガン照らしつけている。いや、寧ろ張り切りすぎている。もうすこし仕事を休めてほしい。厚くなってきたので、自動販売機でなにか飲料を買おうと思ったが、ノーマネー主義者の俺は、37円しかポケットに入っていなかったので断念。

本部に着くと、何故かみんなソワソワしていた。落ち着きがない。近くで何かの機会を操作していた月末に聞いてみると、「春日川と恭助に訊けばわかる」と、追いつ返されてしまった。

階段を登っていき、恭助を見つけて事情を聞きだす。生憎、カツ井は持ち合わせていない。

「で、なんだ、この騒ぎは。」

「どこから話せばいいのかわかりませんが、とりあえず、麗一くんが拉致されました。」

「なにイ!？」

「連れ去った相手は、“クラッシャー”の中でも、戦闘能力の特化した“ハイ・クラッシャー”と呼ばれる者で、麗一くんを何らかの目的で、“廃界”へと連れ去ったようです。」

「ハイカイ?」

「“廃界”というのは、クラッシャーたちの本拠地があると考えられている、『使用済みの世界』です。時間調整者が世界の中身を移し換え、それまで中身を包んでいた殻、用済みの世界のことです。」

「律儀に説明してくれる恭助だが、生憎俺の脳ミソでは処理しきれない。」

「ま、まあつまり、使い終わった世界をクラッシャーたちが住処にしてる、ってことだな?」

「そういうことです。」

それから恭助は、麗一を助けるために“廃界”へ向かうこと、それから豆知識として、クラッシャーと調整者の好みの違いも教えてくれた。たとえば、クラッシャーは醤油ラーメン派で調整者は豚骨ラーメン派とか、白色を基準に形成されている調整者の服に対して、クラッシャーの服は黒一色、とか、如何でもいいことなど。

「で、問題が一つあるんですよ。」

「何だ？」

「それは、この“廃界”に行く方法です。」

「行く方法がないのか？」

「いや、方法ならあります。」

恭助は、一瞬窓の外の明るすぎる太陽に目をくれ、そしてまた俺に向き直る。

「方法は、この世と“廃界”の境にある『大宮城』においてあるといわれている『鏡』から、向こうの世界にいけるといわれているのですが」

「じゃ、早くそこへ行こうぜ。」

「いや、問題はまだ続きます。大宮城が何処にあるか分からないうえ、大宮城の周りには万人も跳ね返す強力な結界が張り巡らされているとかって資料に・・・」

「それは資料の情報だろ。実際に行ってみなきゃわかんねえ。」

「で、でも・・・」

「心配すんな。じゃ、俺は先に行ってる。」

背後で、ドアが開く音がした。

「どうやって行くんや。」

春日川の、背筋が凍るような声だった。ビクツとした。ハッキリいって、事の状態を軽視して、そこまで深く考えていなかった。

「え・・・」

「あたしらには、空を飛ぶすべがない。その道具となるべきものもない。その状況を、どうやって打開するのかって、聞いてるンやで。」

「そ、それは……」

「そーゆー台詞言っんやったら、まずは考えてから言ってほしいもんや。」

「……」

背後で、再びドアが開く音がする。駆け込んできたのは中村と清水だった。

「勝手ながら、話はドアの外で聞かせていただきました。すみません、春日川さん。」

「あ、あんたら……」

「でも、心配は無用です。この施設の地下倉庫には、術を引き起こす方法……つまりは呪文を記した紙が大量にしまつてある、というのはご存知ですよね？」

「おいおい、初耳だぞ。つーか、この見かけオンボロ塾に、そんな地下倉庫なんかあったのすら初耳なんだが。まあいいや。」

「その中の、上級呪術を記した紙に空中を飛翔する術が記してあるものがあつたんです……」

「なんやて!？」

「そ、それじゃあ……!!!!」

「ええ。大宮城にいくことが出来るというわけです。」

「いよっしゃあ……!!」

が、春日川は少し困った顔をしている。

「あ、でもアタシ、術がもう使えないんだつた……」

清水は、微笑を浮かべながら、春日川に一枚の紙をわたす。

其処に記されていたのは、封印解禁術。

「これ……」

「術を扱う能力を封印された術者の、その封印を解き放つ術の書いてある紙です。これなら春日川さんも……」

「いや、いい。あたしはここでまっとるわ。」

「え・・・？」

「長年、戦いの場ってモンから離れとったら、その間隔を忘れてしもうたねん。それに・・・」

春日川は、貰った解禁術の載っている紙をクルクルと丸め、それを清水に返す。

「今までの戦いだって、あたしはこうして待ってた。だから、今回もそれは変わらん。あんたら、行って暴れてきてやったり。」

「・・・はい!!」

清水と中村は、返事をして出て行く。春日川も、その後に続く。

部屋に残ったのは、恭助と俺。

「もう、行くんですよね。」

「ああ。早いに越した事はない・・・と思う。」

恭助は、先ほど中村から渡されていた飛翔術の書いてある紙を、黙って俺に渡す。

見ると、それは上級術にも関わらずに、呪文が一行の半分ほどしか載っていない。本当にコレで空が飛べるようになるのか、疑わしいくらいだった。今までの術はどれも、中級術で既に、呪文は二行を越していた。

「恭助・・・」

「なんですか？」

「本当に・・・コレで飛べるのか？」

「さあ？僕には分かりません。」

無責任な答えを返し、無責任な笑みを浮かべて見せた恭助に呼応するかのように、空気に溶け込むような、体が軽くなる感じに押し包まれる。精神体になるのである。

紙を目の届く範囲に置き、右手を右斜め45度の位置に上げる。

左手は前に突き出し、呪文を詠唱し始める。

「息吹の力を、汝、我が身に宿すことを許さん・・・」

背に、力が渦巻く。

「舞え、白き翼よ——」

背に渦巻いていた力は変化し、それは白く光り輝く一対の翼となる。足で、力の限り床をけり、そのまま窓を突き破って夏の太陽が輝く空へと飛び立つ。

翼を最大限まで広げ、床を蹴った時の勢いを落とさないために、たまに羽ばたきながら、この世と“廃界”の境にあるという、『大宮城』を目指す。

「行きましたか・・・」

恭助は、隼人が飛び去ったのを見届けると、片手で太陽に向かって印を描く。

現れた衣をはためかせ、熟知した先ほどの術を手早く済ませる。衣を突き破り、一体の光る翼が出現する。

そして割れた窓から、飛び立つ。

割れた窓に、衣の裾が引っかかって切れた。

衣の切れ端は、夏の湿った生暖かい風に乗って、部屋の床に落ちる。その色は、まるで白の生地が太陽で焦がされたかのような・・・。

漆黒をしていた。

第十二章：突入Ⅰ（後書き）

お久しぶりです。今回、ちょっとわけあって投稿が遅れてしまいました。すみません。

そしてその理由とは・・・・・・

多分、其の内分かと思っています。曖昧な理由ですみません。そしてその理由も、まだ“計画段階”なので、必ず実行されるとも限らないわけです。では、今回はこの辺りで失礼します。毎回の事ながら、読者の皆様には限りない感謝を変わず。では

第十三章：突入ⅠⅠ

上空。空を切って進む、一つの光があった。

「考えてみれば、世界の境界つてのが何処にあるのか訊かないで出てきちゃった・・・」

まあいい、テキトーに飛んでけば、境界とか言うところに出るだろう、とか考えていた俺は、背後からなんらかの気配を感じ、飛ぶのをやめた。

「誰だっ!？」

漆黒の衣を羽織った何者かは、俺の目の前まで来て止まった。

それは・・・

「きよ、恭助!？吃驚した、驚かすなよ・・・」

恭助だと分かって安堵したのも一瞬、羽織っていた衣の色を思い出す。

「お、お前・・・!!」

「なんですか?・・・ああ、これですか」

自分の着ている漆黒の衣の裾を掴んで見せ、笑みを浮かべる恭助。

「ずっと黙っていました、僕は実は、情報収集型の、最も人間に近い波長を出して存在しているクラッシャーなんですよ。」

「は？」

「バカにはちよつと難しすぎましたか。」

「・・・コイツ、何気に俺にケンカ売ってやがるのか・・・？」

衣の端を離し、衣のポケットに両手をつっ込む恭助。

「一々説明するのが面倒くさいので・・・まあ、つまるところ僕は、君たちの敵、というわけです。それで、僕が所属する、“クラッシャー”の組織から君たち時間調整者の情報を収集する役として、潜入していたわけですよ。」

「てめえ、俺たちの仲間じゃなかったのかよ!!」

「僕は君たちの元に潜り込んでからは、一度も、『僕は君たちの

仲間だ』とは言っていないせんよ。・・・ま、仲間と思わせるようなフリはしていましたがね。」

「・・・で、俺の元に、何しに来たんだ」

浮かべていた笑みを、嘲笑にも似た冷笑に変えた。

「大宮城に近づけないのも、僕の仕事でしてね。もう少しで僕たちの望みが叶うんです。邪魔をさせるわけには行きません。僕は実戦向きのクラッシャーではないんですがね。“上”が五月蠅いんですよ。」

「あつそ。・・・でもな、俺らだって邪魔されるわけにはいかねえんだよ!!!」

腰の刀を引き抜き、その勢いのまま恭助に斬りかかる。

が。恭助はポケットに隠してあったものと見られる小型ナイフで、完全に攻撃を防いでいた。

「止めておいたほうが身のためですよ。貴方の、その未熟な力では何も出来ない。勝手に乗り込んで、仲間に見捨てられて、そして犬死にするのが運命といえるでしょう。」

「（コイツ、完全に俺にケンカ売ってやがる。チクショーめが）」
ふと、下の方向から光の気配を感じた。咄嗟に剣を引き、身を翻すと俺の刀を受け止めていた恭助の小型ナイフが、下方からの青白い光によって弾き飛ばされていた。

「誰です?・・・ま、どうせ隼人さんの助っ人か誰か、でしょうけど。」

ナイフを弾き飛ばされたときの衝撃で痺れたと見える手をさすりながら、恭助が下方を見下ろす。

と、再び青白い光の攻撃。

今度は恭助の持っているものではなく、恭助本人を狙ったものらしかった。

俺も恭助に続いて下を見る。其処に飛んできたのは。
中村、ただ一人。

「隼人さん!!!コイツは私に任せてください!!!」

そんな事言われて、あつさり許せるほど、俺のプライドは軟弱なものじゃない。

「ンなこたできるかつ！！！」

中村は、今度はお前を打ち落とすぞといわんばかりに、手を組み、青白い光のエネルギーを溜める。

「うおおつ！？ちよ、ちよつと待てエ！！わかったから、俺を打ち落とすのはやめろあ！！」

組んでいた手を、離す。顔が、真剣そのものになった。

「ありがとうございます。隼人は、こんなところでモタモタしている場合じゃないですし、それに、私は恭助に……」
顔に陰が帯びる。過去に恭助に、何かされたのか。

「今でも、覚えているわよ。恭助。あんたが……あんたが……っ！！！！」

手に握った拳が震い始める中村。相当ひどいことをされたんだろう。

「私の……私がコツコツ溜めてたヘソクリを、全部使ったことを！！！！」

「はあ！？」

思わず口に出てしまった。

何気に顔を引きつらせながらもしらばつくれる恭助。

「何のことでしょうね？」

「惚けるな！！！！被害総計金額もしっかり覚えてるわよ！！！！その金額、実に4万7351円！！」

そこまでヘソクリを溜められることそのものが羨ましい。

「いや、僕としては全く記憶にな……」

「ほざけえツツ！！！！」

不意打ち！！中村の手に、先程よりも強い光が集まり、それは一瞬にも満たないうちに恭助に向かって放たれる。

「ぐわっちょ！！！！」

いきなりの不意打ちに、流石の恭助も対応し切れなかったようだ。
マトモに技を喰らい、カエルが踏み潰されたときのような、奇妙な

悲鳴を上げ、黒こげになって下方へと落ちていった。

「（怖い女だ・・・今度から『軍曹殿』って呼んでやろう。）」
俺がそんなことを思っているとき。中村は、ポケットの中から何か取り出す。

「ああこれ、大宮城の場所を記した地図です。役に立つと思います。」

ではこれにて、と中村は、落ちていった恭助を追いかけ、下方へと飛び去った。

っていうか、大宮城の場所、分かったんだ・・・

上空に、雲の切れ間が除いていた。地図でみると、この辺らしいが、宮城の姿が見当たらない。

「本当にこの地図、あつてるのか？」

そのまま飛び続けること一分未満。
がんツ！！！！

「いつてえ！！」

何かにぶつかった。

が、前方をみても、何も見当たらない。

「あれ・・・？」

試しに、手でたたいてみた。コンッ！！という硬質な音が響く。
ここで間違いないらしい。

が、問題があった。

「どうやって中に入るんだ？これ・・・」

最大の難関である。

第十三章：突入II（後書き）

すみません、またもや投稿が遅れてしまいました^^;; 若しかしたら（未定ですが）新投稿を始めるかもしれない小説の執筆で^^;;（あくまでまだ未定ですが）とりあえず、今回はこの辺りで失礼します！

第十四章：大聖靈の加護

「きよーすけええ！！待ちなさい！！！！」

どンドン落下していく恭助を追う中村。待てといわれても、気絶してるのに空中で待つことなんて出来やしない。

「もう、今日という今日は、あんたが木っ端微塵になるまでスペクトル・クラッシャー・ビームを食らわすからね！！！！」

そういうと中村は、風圧でずれかけた眼鏡を目元に戻した。眼を閉じ、暫しの間顔に乗っている眼鏡に気をこめる。

眼鏡が、閃光を放った。

「スペクトル・・・」

目標は、眼下を落下していく恭助。

「クラッシャー・・・」

恨みという恨みを、眼鏡に込める。

「ビーム！！！！！！」

眼鏡が、光の筋を描いた。

それは眼下を落下する恭助を貫き、勢いを弱らせずに目下に広がる街の一角を破壊した。

「よっしゃあああ！！」

宿敵となった元・恋人を打倒し、空中でガッツポーズをとる中村だが、破壊された街は一体どうするのか。

「おい、誰かいませんか？」

硬質な見えない壁の向こうでは、此方からの音が聞えないのか、それとも無人なのか、誰かが出てくる気配が無い。

「おい、誰かー！！」

透き通った壁をノックするように叩く。

「だーれーかー！！！！」

しかし、誰も出てこない。

「チクショー！！とつと出て来いやあ！！何時まで待たせる気なんじゃワレエ！！」

ついにブチ切れた俺は、透き通った見えない壁に向かって上段回し蹴りと正拳突きを食らわした。

しかし。

「ぐおお・・・いてえ・・・」

案の定、壁はどうにもならない。

「はあ・・・ホントにここなのか？疑わしいな。」

もう一度出直そうかと迷っていたとき。背中辺りがヒヤツとする感覚が俺を襲った。

一瞬後、ジェットコースターに乗った時などに感じる、腹の辺りがフワツとする感覚に襲われた。

即ち、俺自身が落下して・・・

「ぎゃあああああ！！！！」

いなかった。

「あ？」

自然と視線が上に向く。

そこには、妙齢の美女が、先ほど硬質な壁があつた辺りから手を差し伸べ、落下していただろう俺を助けてくれた。

「あ・・・どうも・・・」

「全く。騒がしいと思ったら、人間の小僧がこんなところに来るとはな。想定範囲から外れたわ。」

「は？」

長い白銀の髪を強風に靡かせ、美女は更に文句を言う。

「しかも、調整者の服を着ている。見習いなのか新種の妨害なのか分からんが、アタシに用があるんだつたらとつと済ませてもらいたい。」

いや、だからあんたは誰なんだって。

「ああ、自己紹介がまだだったか。アタシはこの大宮城の主兼、」

妙齡の美女は、顔にかかった髪を手で払いのけて言った。

「この世で唯一異世界と此方の世界を行き来する事が許された大聖霊、ティーノ・クラシオスだ。」

大聖霊って、この世に存在してたのか。

第十四章：大聖靈の加護（後書き）

え、お久しぶりです皆さん。きつと更新が遅すぎてウンザリしておられる方が殆どだと思います。ほんつとすみません！！ 結局前話の後書きで暴露した新小説は、この小説が書き終わったら投稿する事にしました。

・・・では、そろそろお暇しておきます。読んでくださった全ての方に感謝しつつ。

#15 異界へ

「——そういうわけか。やはりお前は調整者だったのか。」

余裕で体育館2つはあるだろうという広い部屋に通され、ティーノはソファーにドッカと腰を下ろし、ダラダラとお摘みを食いながら俺の話を聞いている。頼むからもう少ししゃんとしてほしい。何で俺の周りには気の強い女ばかりあつまってくるのだろう。

「で、クラッシャーに連れて行かれた仲間を助ける、と？」

「そういうことです。」

ティーノは、お摘みが山の如く積まれている皿から一握りのお摘みを口の中に放り込んだ。・・・いや、詰め込んだ、のほうがいいか。「ま、たしかに奴らの世界に行く事ができるのはあたしが持つてる、『聖鏡』だけだしな。」

モグモグと口を動かしながら言う。お願いだから物を口に入れたまま喋らないでくれ。

「鏡を使うのはいいけど、条件つきだよ。」

今まで緩んでいたティーノの目つきが、急に鋭くなる。それにっられてか、俺も姿勢を正した。

「絶対に、アイツらを滅ぼして欲しい。」

「え・・・」

ティーノはお摘みに手を伸ばしかけて、止めた。手を引っ込める。

「アイツらはね、結局は悲しいだけなんだ。この世界ではみんなと一緒に暮らしていけない。本当に廃界には何も無いんだ。そんなところに一人取り残されて、一人で恐怖して、一人で悲しんで。だから、奴らは同じ立場に居る仲間同士で集い、調整者に逆襲をする」と誓った。」

まるで、自分がクラッシャーだったかのように、淡々と喋る。

「・・・アタシは、元々はクラッシャーだったんだよ。でもね、どこかで足場を踏み間違えたんだな。結局今はクラッシャーじゃない

くて、大聖霊なんてことしてる。運命って分からないもんだよ、まったく。」

最後のほうは呆れ顔で、でも決してあざ笑うような様子ではなく、少し微笑みながら話した。自分の全てを。

「どっちかっというところ、滅ぼすっていうより『救う』っていうほうが正しいのかもね。調整者の持つ武器は、クラッシャーを救うことができるのさ。」

そこまで話すと、元々緊迫した空気が苦手なのか、表情を一気に綻ばせた。そしてお摘みが山のように盛られている皿を片手でガツシと掴み、お摘みを口の中に流し込んだ。

「で、お前、いつ廃界に行ってくれんだ？」

「いや、今すぐにでも・・・」

「そうか。だったら、ついて来い。廃界に行かせてやる。」

話、急すぎませんか、大聖霊さん。

デカ過ぎるこの城みたいな建物の中を、5分ほど歩いた頃。目の前には、これまた無駄にデカイ扉が立ちはだかっている。

「この部屋の中に、『聖鏡』がある。・・・いや、鏡っていうてもな、姿を映し出すようなものではない。異世界を映し出し、この世界と重ねる。その力でアタシらは別世界にいけるんだ。」

明らかに重そうに見える扉を、片手で押して開く。意外と怪力だ、この大聖霊。

「そして、コレだけは言っておく。」

もう、戻って来れなくなるかもしれない、と。

「だがな。お前の運命はおまえ自身が決めるものだ。他の誰かにその権限を委ねることは、絶対に許されない。これだけは、心して行け。」

なんのことかよく分からない。とりあえず頭の隅に置いとけばなんとかなるだろう。

「わかりました。では、行ってきます。後々俺の仲間がここに来るかもしれませんが、その時は宜しくお願いしますね。」

扉の向こうには、光が満ちていた。

「ああ。わかった。健闘を祈るぞ。」

「はい。」

後はただ、光に向かって歩を進めるだけだ。

#15 異界へ（後書き）

皆さん、長らくお待たせしてしまい、誠に申し訳ございません・
・>（―――）< もうこのことに関しては精進するしかないと思
われるのですが、ストーリーの骨組みはとつくの昔に思いついてい
るわけです。では、何が投稿をこんなにも遅らせるのか？という疑
問の答えは簡単です。ただたんに、ストーリーの肉付け部分を考え
るのがナメクジ並みに遅いだけなのです。とりあえず投稿を早くし
たいと思うので、今書いている別小説（約2種類）をそっちのけで
がんばろうと思います。しかし、それでも遅くなる可能性もありま
す。すみません……。

では、今回はこの辺りで失礼します。全ての読者様に感謝を捧げ
つつ。

未来屋と少年 新年明けおめニ談話

隼人（以下：隼）「……というわけで、新年！！やつほーい！！」
麗一（以下：麗）「……いや、新年なのはいいんだが、このコーナーは一体何なんだ？」

隼「いやあ、どう考えてもネタに尽きた作者が、苦し紛れに書いた誤魔化しコーナーとしか思えないでしょう。そんなことはとにかく、このコーナーは俺ら未来屋コンビ、麗一と隼人が新年をお祝いするコーナーらしいですよ。みなさん、一緒に新年をハイテンションに祝いましょう！！」

麗「なんだ、そういうことか。……とはいえ、どういって祝ったらいんだ？」

隼「うーん、まあソレもそうなんだよな。とりあえずはこのマニュアル通りに勧めればいい感じがするんだけど、ハッキリ言って、コレ、作者の言いたいことを俺らが代弁するコーナーみてえになっちゃってるしな。」

麗「意外とハッキリ言うな、お前……」

隼「だってよお、俺がなんで作者の事を気遣わなくちゃいけないんだって感じだとは思わんかね？」

麗「（なぜそこで口調が変わんだ！？）確かにそうだな。」

隼「まあ、一般の読者様の言いたいことは、『一話一話の文章量少ねえんだよ！』とか、『とつとと更新しやがれ！！このクソ作者！！』とか、『文章下手糞なんだよバーカバカストコバーカ！！』……ってとこだろうな。まだまだ沢山の不満という不満が降り積もっていきそうだな。」

麗「まあ確かにな。」

隼「そうだろ？我らが作者には、『学習する』という脳内コマンドが無いと思うんだ。」

麗「同感。ソレ、超同感。」

隼「そう思うだろ？・・・つつてもな、作者が小説書くのが（隠れ）趣味だということは確かだし、新小説の構想を練っているのも確かなんだよな。」

麗「新小説か・・・。新小説投稿されはじめるとしたら、俺らの存在薄くならねえ？」

隼「確かに・・・。ソレは嫌だな。作者も、多少の俺らの我儘きいてくんねえかねえ？」

麗「まあそれもそうだな。たとえば新小説に、俺らと似た性格と似た名前のキャラが出てきて、この小説とキャラ的ところで微妙に繋がってるとか。」

隼「お、それいい考えだな！！・・・でもソレ、はつきり言って、傍から見ればキャラのネタ切れになった作者がネタの使いまわししているようにしか見えなくねえか？」

麗「それは禁句だ・・・って、マニュアルに書いてあるぞ。」

隼「あ、ホントだ。」

麗「つつても、まだ新小説が本当に連載されるかどうか未定なんだし、あんまり深く考えなくてもいいんじゃないかと。」

隼「そうだな。考えてみれば俺ら、かなりのその場しのぎな性格してるしな。本編だと、俺、まだ夏休みの宿題おわってねーぞ。」

麗「俺なんか拉致されたままだし。しかも、真冬に真夏のストーリー書くってどうよ？」

隼「もう少し、季節感考えたほうがいいと思う。」

麗「そう思うよな。季節が同じだと、読者のほうも情景を想像しやすいとか、そういうこともあるだろうし。」

隼「あと、関係ねえけど、15話から表示が、『#15』ってなってるのには、たいした理由はねえから、あんまり気にしないでくれ。作者がただ、『#』っていう表示のほうが見やすいかなあ、と思った結果だそうだ。」

麗「あと、作者の新年の野望（抱負）の中に、『今年こそは、ブログ作りたい』という馬鹿げた妄想があるらしいが、それに関しては

よく分かん。」

隼「結論から言うとな、今年も期待しないで待っててください。『っつーことだな。』」

麗「期待するなって……。まあそれもそうだな。期待を裏切っちゃうことだって多々あるだろうしなあ。作者のほうからすれば、できるだけ期待は裏切りたくないそうだが。」

春日川（以下：春）「おーっすレイチに隼人おー！！元気にしてつかあ？」

隼「び、ビックリしたあ……。！！」

麗「うわ、コイツ昼間っから酒入ってる……。」

春「悪いかあ！？新年なんだからよお。」

隼「あれ……。？春日川さん、関西弁じゃなかったか？」

麗「いや、春日川はもとも、関西出身じゃねえからな。両親の仕事の都合で、4歳から関西にいる親戚のところで暮らしてたらしい。」

隼「あ、よくいる、酒が入ると素性が現れる人？」

麗「まあそういったところだな。」

春「何ゴチャゴチャ言つとんじゃい！！そろそろ時間だぞ！！」

麗＆隼「嘘！？」

春「っわけだ、読者の皆さん！！良いお年を」

麗＆隼「あーッ！！俺らの台詞だぞソレ！！！！」

作者「明けておめでとうございます！！みなさん、去年は本当にお世話様でした。考えてみれば、この小説が連載され始めたのは去年の5月。早いものです。今年も、できるだけ読者様の期待に副えれば、と思っております。今年も、白蓮と『未来屋と少年』を、よろしく願います！！ではっ！！」

未来屋と少年 新年明けおめミニ談話（後書き）

みなさん！！明けましておめでとうございますッ！！！！

えゝ、新年、ということ、彼らにミニ談話をして頂きました。本当に短いです。ミニ過ぎます。ですが、読んでくだされば、と思っています。

本編の最新話のほうは、もう少しで投稿できそうです（相変わらず短いですが^^;）。

とにかく、色々ありましたが、今年もよろしく願います！！

16 異界へII

16

光が支配する空間を、俺は歩いていた。

「もう、廃界についたのか？」

分らないことだらけだが、この世界のどこかに麗一がいることは確かだ。

しかし、廃界つてわりと綺麗な空間だな。もつとグツチャグツチャヌメヌメした空間なのかと思っていたんだが、その想像は哀しくも外れた。眩しくもなく、暗くもない、丁度いい明るさの淡い光に包まれた無の世界。

とはいえ、何処までも光が続くだけで、本当に何も無い。あてもなく彷徨うなんて面倒くさすぎるし、どうすればいいのかわからない。

「おーい・・・」

とりあえず喋ってみる。が、それは虚空に消えるばかりで、何かが帰ってくることはない・・・と思いきや。いきなり足元に、銀色のナイフが突き立った。

「うわッ！？あ、あぶねえー！！」

柄には紙が巻いてある。まあ、その紙に書いてある事を読み、つていようなことだろうな。

巻かれている紙を取り、それを読む。

「えー、何々？『そのまま、まっすぐ進め。』・・・？何のつもりだ？」

ナイフが勿体無いので、引き抜いて腰のベルトに差した後、指示通りそのまま進む。

と。足元が、消えた。

そうとしか言いようが無い感覚が体中を支配し、光が体を包み込む。

「な、なんじゃこりゃあ！？ナイフが飛んできたかと思ったら、次はコレかよ！？」

俺の体を包んでいる光は、より一層強さを増した。強すぎる光に思わず目を瞑る。

光の外では、何が起きているのかは分からない。

薄暗い部屋の中。唯一の光源であると言える蝋燭の光が、不意に揺らいだ。

「・・・・・・・・。」

夜の闇のように深い闇色の瞳にはもう、嘗ての光は宿っていなかった。

「どうしたのさ、早く壊してよ。その力を、僕に見せてよ。」

光の無い、その氷のように冷たく尖った視線が、茶髪の少年を見据える。

瞬間、薄暗い部屋の中に、力が満ちた。尋常ではないその力は、急速に黒髪の少年の手の内に集まる。

凄まじい光が発せられた。唯一の光源だった蠟燭は、その存在を消滅せざるを得ない。

茶髪少年の表情が、歓喜に満ちる。

「すばらしい力だね。ホントにすごいよ、キミは！！やっぱり、キミをさらってきてハズレではなかったようだよ。」

部屋は、先程より暗くなっていた。

「ぐおッ・・・・・・・・！！！」

突然落下感が消えたかと思ったら、今度は石畳の路地に叩き付けられていた。

またヘンなとこに来ちゃったな、と思いつつも、身の回りの調査

は怠らないように気をつける。

石畳の路地は、目の届くところまで、ずっと続いていた。辺りは、どこか中世ヨーロッパ風の建物。薄い霧が立ち込め、それはまるで現実から何かを隠すような感じだと、俺は思った。

立ち上がり、服に付いた砂埃を払う。

とりあえず近くの家まで足を運んでみたが、案の定、家の中には誰もいなかった。

・・・困った。

落ちたのかと思ったら、いつの間にか無人の空間にいるってどういうことだよ！

内心では叫びたい気持ちが山々だったが、叫んだところで解決するわけではない。

家の中から再び外に出て、歩き出す。町の外れにでもいけば何かあるかもしれない。

・・・そう思ったときだった。

後ろにかすかな気配。振り向いた瞬間の首筋の痛み、遠のく意識。

何が起こったのかすら分からなかった。

霞む視界の向こうでは何者かが、氷のように冷たい目で俺を見下ろしていた・・・

#16 異界へII（後書き）

えゝ．．． また遅れてしまいましたorz

だがしかし！！コレも私の失態！！言い訳なぞ醜いことは書かぬ！！．．．．．なんてスゴイことを言えるほど、すげえ人間じゃないですよ私．．．。

さて、早いものでもう3月。巷ではようやく春休みが始まりましたが、私は3日ほど早く休みを迎えておりました。．．．え？サボった？いえいえ、そんなことはしません。インフルエンザになって悶え苦しんでいたのですよorz いやあ、本当に死ぬかと（以下略さて、春になりましたね。温かくて過ごしやすいです。ことに寒がりな私からすれば、春は神の季節です。でも花粉症予備軍みたいな感じですよorz ま、まだ花粉症だつて決定したわけじゃないんだからね！！勘違いしないでよ！！．．．ここでツンになってみる意味がわかりませんね、はい。

さて。新小説を書くというような話をチラつかせていました。．．．もちろん公開する予定ですよ。

ただ、ここではなく、4月に新設予定のブログにて更新するつもりです。．．．いや、もう設置してあるんですが、あまりにゴチャゴチャした状態なのでとても公開などできません。．．．！！

というわけで、新年度も未来屋と少年、そしてブログと新小説をよろしく願いますッ！！ではでは、長くなってしまうてすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2880e/>

未来屋と少年

2010年10月9日06時46分発行